訂六女子國語讀本

卷五

4b
810
大14

42208

教科書文庫

4
810
42-1925
20000
71507

資料室

4b
810
大14

大正十四年二月十八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書

篠田利英
岡田正美
吉田彌平
小島政吉
共編

訂六 女子國語讀本 卷五

金港堂書籍株式會社

廣島大學
教
71507

目次

一 明治神宮……一
二 十二德（昭憲皇太后御歌）……一〇
三 春宵……德富健次郎 一五
四 峠の茶屋……夏目漱石 一六
五 戰時の巴里……島崎藤村 二一
六 鍵の室障子の家……河上肇 二七
七 旅館……厨川白村 三三
八 ことばづかひ……三七

九　徳川光友の室……四一
一〇　時間……四六
一一　修善寺より……尾崎紅葉　五一
一二　十國峠の眺望……高山樗牛　五六
一三　筆の歌……武島羽衣　五九
一四　マヂソン夫人……下田歌子　六一
一五　樂地……幸田露伴　六六
一六　自省……阿部次郎　七一
一七　おまんの方……七九
一八　黒井繁乃……八二
一九　江津川……徳富健次郎　九一

二〇　蒲の花がたみ……瀧澤馬琴　九五
二一　天下第一の義舉……蒲生君平　一〇四
二二　川どめ……一〇八
二三　華嚴の瀑壺……田山花袋　一〇九
二四　夏……大谷繞石　一二
二五　香港……水野廣徳　一二七
二六　金字塔……久保勘三郎　一三四
二七　九月十三日の夜……芳賀矢一　一三九
二八　禁庭の野分（昭憲皇太后御作）……一四四
二九　空行く雁……曾我物語　一四六
三〇　月光の曲……一五〇

六訂 女子國語讀本卷五

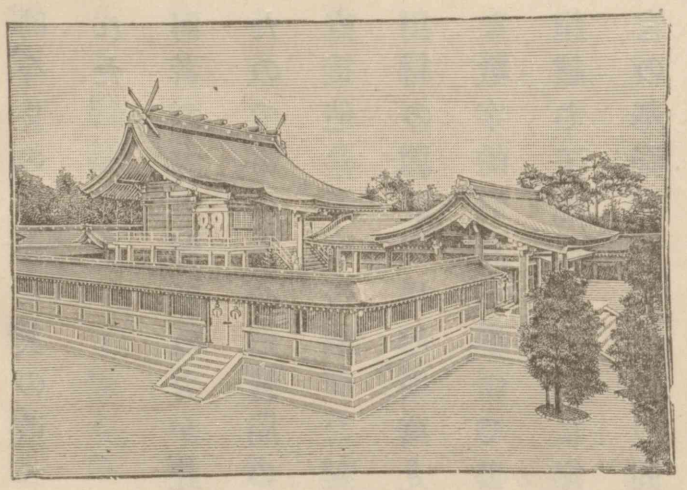
一　明治神宮

快美な色彩の反射と和らかい感觸とを持つた日の光に包まれた代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高く匂つて來る新しい檜の香を嗅ぎながら幾度其處を通つたらう。森の中からは時として石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が快い調子を作つて流れて出た。或時は無數の蟻の集團が大きな餌物を引くやうに、六七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多

數の人夫が汗みづくになりながら、曳々聲して森の中へ引入れるのを見た事もあつた。

あの中に明治神宮が建つのだとさう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感ずると同時に、生の親の墓に對するやうな強い懷かしさが充溢した。　そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗取つて基礎工事が終り、小屋組が出來て、殿舍の形の次第に整つて行くのが堪らない程嬉しく思はれた。

其の明治神宮が到頭竣工を告げた。　曾て赤土の露出して居る上に、鋭く尖つた切石が幾箇も列んで、烈しい日に光つて居るのを見た處には、今すが〳〵しい色の小砂利を敷詰めた。　參道の白い線が常緑の森の中に長く續き、其の以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開して居るのが見えた御料地は、いつの間にやら全く見ちがへる程美しい景色になつて、森嚴と幽邃との趣を兼備へた鬱蒼たる密林の中から、所謂流造素木の神殿の隱顯して見えるのが、何とも言へない神々しい感じを起させる。



明治神宮御本殿

神域。　眞に神の在しますに適した莊嚴と靜寂と幽雅との

領土。私は始めて此の完全した明治神宮の神苑に立つた時、今更のやうに其の改つた光景を觀て、強烈な感激に打たれた。

何者の力。何者の力が此の新らしい建設の事業を完成したのであらう。造營局の記錄の上には、大正四年四月以來、直接造營の事に當つた延人員が約百何十萬人であるとか、用材の總計が尺〆一萬九千本であるとか云ふやうな細密な數字的計算を擧げて書いてあるが、さう云ふ數字を高く超越して、隱れた部面に働いた强い力こそ實に此の明治神宮の基礎を千歲不動の固さに築いたものであつて、限りも無く高い明治天皇の御聖德と、はてしなく深い昭憲皇太后の御仁德、そして此の二柱の大神の御惠に對へ奉る國民の至純な感謝の心、これが陰に陽に工程の進歩を刺戟して遂に此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力である事は、何者も否むことの出來ない事實である。

嗚呼至純至誠の動機から出た青年團の造營奉仕、何百里の遠方から眞心を籠めて輸送して來た無數の獻木、それが何を語つて居るか。實に此の神宮の御苑を形成する一本の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く皆國民の燃えるやうな熱誠が籠つて居るのである。斯くて殆ど全く國民の誠意を以て、造り成し奉つた其の宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇・昭憲皇太后御二柱の神靈が宿らせ給ふのであ

る。何と云ふ美しい尊い事實だらう。

今までの神社に曾て見た事のない、明治神宮獨自の特色は實に此に在るのである。私は表參道を直路神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遙に神域の中を拜した刹那に、先づ此の事を直感した。そして一歩々々美しい小砂利の上を神殿に近く蹈入るに隨つて、愈、肅然たる心持に成つて、深く襟を搔合はせた。

參道の兩側には盡きることを知らない密林が、何處までも長く續いて、行くに隨つて、それが段々濃く成つて行つて居る。御鳥居から一町許り奥へ入つて、神橋へ來ると、何處からとも無く清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山萬成

産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、橋下は溪流の趣を摸した風致の好い小流で、筑波山の國有林から移した自然石の据ゑられた處、淺野侯爵家の寄附に係る數十株の楓は、その影を水面に落して美しい趣を成して居る。此處は神苑中獨り人工を加へた處で、神苑の殆ど總てが纖細な技巧を排した自然的の大觀を呈して居る中に、特殊の庭園趣味を發揮して居るのである。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉並木に成つてゐて、其の左側の並木が絶えた處に、樹齢千七百四十年を重ねて居たと云ふ直立六丈餘の臺灣産の檜の大木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、高さは三丈

九尺に達すると聞いた。

此の鳥居の在る所は、南方原宿方面からする幅員八間の南參道と、北方千駄ケ谷口から來て居る幅員六間の北參道との接合點で、此處から左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大して、西を指す事百五十間、其の道の盡きた所で右を見ると、ぱつと眼界は急に廣く且明るく成つて、一町の北方に亭亭として高く聳えた松の疎林を背景にした土佐繪の如き神殿の檜皮葺を拜することが出來る。

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合はせて其の總坪數六百五十坪、本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造つたもので、近く拜殿に上つて拜すると、芳しい檜の香氣が強く

鼻を撲つて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は卽ち神靈のおはします內々院で、衆庶の窺ふことを許されない神聖の場處である。

何事のおはしますかは知らねども、
かたじけなさに涙こぼるゝ。

私は默禱を終ると始めて向ふを仰ぎ見た。明るい社殿。何と云ふ明るい快い感じを持つた社殿だらう。今までに見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に靜寂な、併し陰慘な感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは隱す所のない心持で十分な光線に總てを

解放し、總てを暴露して見せてゐる。然もそれでゐて決して淺露な心持はせずに、却て一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせるやうな強い威壓の力が迫り寄るのを覺えるのであつた。（「明治神宮記」に據る）

二　十二德（昭憲皇太后御歌）

節制

花のけがれをみだりの枝のさつきもつゆ
ほどくまなくそまほれ

清潔

きよきこの心はたとへくるしくとも
うきはいのちもなほ惜しからず

勤勞

みがかずばたまのひかりはいでざらん
人はけがれかくしてあらじ

沈默

まことなきはかりそめあれ
ことばをあだにちらさばちらん

確志

人ごころかくらまつばきるまの
まちうはやうもやうれざるう

誠實

とりごとはるこうごしの花もあれど
ふほふこころはるはきるな

溫和

三たびきをりばかきて花ざるう、
まだもほどをなりひてつ

謙遜

たるまはうぐをうたてゆれの
ひきくはくをこえるうな

順序

はるかきみちもきはのんものごとれ
本末をぐるたづざりてば

節儉

ふれるのほどよきふをうぐうずば
未然のはゆもこぐれざるし

寧靜

いうさまこゑはるぶくともむらざもの
こゑはゆうまあるづうけり

ろ義

くまうみをすうはん道もちうきよう
わしおばさん者をさうひと

三　春宵

徳富健次郎*

戸を明くれば、十六日の月櫻の梢にあり。白雲團々、月に近きは銀の如く光り、遠きは綿の如くやはらかなり。春星影よりも微かに空に綴らる。微茫たる月色、花に映じて、密なる枝は月を鎖してほの暗く、疎なる一枝は月にさし出でてほの白く、風情言ひつくし難し。薄き影と薄き光とは、落花點々たる庭に落ちて、地を歩むに、さながら天を歩む感あり。濱の方を望めば、砂洲茫々として白し。何處やらんに俚歌を唱ふ聲あり。

已にして雨はら〳〵と降來ぬ。やがてまた止みぬ。春雲月を籠めて、夜ほの白く、櫻花澹として無からんとす。蛙の聲いと靜かなり。（自然と人生）

*著述家。蘆花と號す。

*名は金之助。文學者、小說家。大正五年歿す。

四　峠の茶屋

夏目漱石*

「おい」と聲を掛けたが、返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向側は見えない。

五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらりふらりと搖れる。下に駄菓子の箱が三つばかりならんで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

「おい」と復聲をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上にふくれて居た雞が驚いて眼をさます。くゝゝ、くゝゝと騷ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる上に、眞黑な茶釜がかけてある。幸、下は焚

きつけてある。返事がないから、無斷でずつと這入つて、床几の上へ腰を卸した。雞は羽搏きをして臼から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めてなければ、奥まで駈ける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけゝつこつこと云ふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。

夏目漱石

床几の上には一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはと

ぐろを捲いた線香が日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收る。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えてゐる、菓子箱の上に錢が散らばつて居る、線香は暢氣に燻つて居る、どうせ出るには極つて居る。しかし、自分の見世をあけ放しても苦にならないと見える處が都とは少し違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけていつ迄も待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、嘸御困りでござんしよ。おゝ〳〵、大分御濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」

「そこをもう少し焚附けてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、しつ〳〵と二聲で雞を追下げる。ここゝと駈出して雌雄は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛出す。

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか刳抜盆の上に茶碗をの

せて出す。茶の色の黑く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に燒きつけられて居る。

「御菓子を。」と、今度は雞の踏みつけた胡麻ねぢと微塵棒を持つてくる。

婆さんは袖無しの上から襷をかけて、竈の前へうづくまる。余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顏を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は、――先刻の雨で何處へか逃げました。」

折柄竈の中がばち〳〵と鳴つて、赤い火が颯と風を起して一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。嘸御寒かろ。」と云ふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに微かな痕をまだ板庇にからんで居る。（藤村）

五　戰時の巴里

島崎藤村*

*名は春樹。文學者。

昨日は十七八歲ばかりの青年の一群に町で出遇ひました。それらの青年は皆學生でした。普通の服に革帶を締め、腕

章を着け、脚絆を卷きつけ、銃を肩にし、列を作つて、兵式の訓練を受けるために公園の方へ行くのでした。中にはまだ若々しい聰明な面ざしのものをも見かけました。彼等はいづれ國難に赴かうとして居る若者達でせう。自分等のことにしたら、短い袴を着けて友達と一緒に學校へ通つて居た年頃だ。さう思つて、しばらく其の群を見送りながら立つて居ました。此の節は、青年期に達したばかりと見えて身體もまだ十分に發育して居ないやうな若い兵士をもよく町で見かけます。

開戰以來、はや七箇月を經ました。動員當時の混雜、市民の狼狽、あの頃の騷を思ふと、自制に自制を重ねて此の非常な時局に處して來た佛蘭西人も、隨分努めたものと言はねばなりません。私は佛蘭西人の精力の發現が寧ろさういふ方面にあるといふに躊躇しません。動員令が下ると共に大統領が巴里市民に與へた諭告は、徹頭徹尾市民に抑制を說勸めたものでした。ジョッフル將軍の公報は佛蘭西一流の多辯でなく、どこまでも謙遜に、所謂東洋的簡潔に書いてあります。昨年の八月以來、當地の新聞は殆ど戰爭の記事で埋めてゐる有樣ではありますが、ごく通俗を旨とした新聞にさへ、實際あまり挑發的な文字が用ひてありません。昨年の冬、巴里市民がボルドー(一)から再びボアンカレー(二)氏をこの都に迎へた時でさへ、町々は平日とかはりませんでし

(一)佛國の西南部、西班牙に近く、大平洋に面してゐる。葡萄酒の產地。大正三年獨逸の大禍をさけて一時都をこゝに遷した。
(二)佛國の首相。

た。日本の赤十字隊も無事當地へ着きました。佛蘭西政府の當局者はその病院に巴里第一流のホテルをあてゝ、紅い日の丸の旗をエトワールの凱旋門に近き好位置に飜させるほどの款待を盡しましたが、派手な歡迎騷などは、遠慮したやうです。見るもの聞くものがかういふ調子です。痛々しいほど沈んで、そしてしんみりとして居ます。戰爭が長引けば長引くだけ、ます〳〵私の身に感じて來たのは、この抑へに抑へようとして居るエナージィです、佛蘭西人の消極的な勇氣であります。

只今の巴里は、言はゞ留守の都です。佛蘭西政府もボルドーよりかへり、各劇場でもマチネーを興行するやうになり、寄席やコーヒー店まで開かれて居ると言へば、以前と同じ巴里を想像させますが、其の實、巴里見物の爲に諸國から集つて來る多數の外國人を相手にした頃の歡樂の都ではありません。しかし純粹な巴里の味は今が、却て味はれる樣です。羅馬舊教的のしつとりとした空氣が其處にも此處にも溢れて居ます。劇の興行にしても、愛國的精神に富んだ出し物を選び、佛蘭西の古今の詩人の作つた多くの詩篇を、名のある俳優が舞臺の上で朗吟し、最後に國歌を歌つて幕を閉ぢるといふしつとりとした行方です。ソルボンヌの大講堂は正面にシャヴァンヌの壁畫が描いてあり、半楕圓形の磨硝子の天井、昔風の建築、總てが古雅で、心持好く出

(一)巴里市にある古い大學。1225年頃創立。
(二)佛蘭西の畫家、1824—1898

來て居りますが、毎週の日曜日には、そこで國民マチネーといふ恤兵的の音樂會があります。佛蘭西の藝術家が祖國に對する事業として開催するのです。私も二度ほどその大講堂へ聽きに行つて見ました。有名な女優の獨吟があり、學士の朗讀があり、管絃樂の合奏があり、最後に一同で佛蘭西國歌を歌ひました。戰時らしい活氣は外部よりも內面に潛んで居て、却てさういふ音樂會などに溢れて居るやうに思はれました。（戰爭と巴里）

六　鍵の室障子の家

河*上肇

「西洋人の生活を何かに纏めて、掌の上に載せて見せよ。」と注

*經濟學者。法學博士。京都帝國大學教授。

文されるならば、私は鍵を出して示さうと思ふ。始めてブ*リュッセルの素人下宿に入つた時、定められた自分の部屋を見廻して、私は鍵の多いのに驚いた。戸を開けて部屋に入ると、其の戸を內から閉ぢる錠がある。北側に窓があつて其の窓にも亦錠がある。一度此等の錠を下したならば、誰も部屋の中に入つて來られぬことになつて居る。此等の錠を見て、道理から云へば、私は安心せねばならぬのであらうが、實際は寧ろ輕い不安と淺い危惧とに襲はれた。戸棚がある、勿論戸に錠があり、抽斗に錠がある。洗面臺の下に四段の抽斗がある、一々それに錠が拵へてある。机に抽斗がある、それにも亦錠が拵へてある。凡そ閉の出來

*白耳義の首府。

るものに、特別に錠の裝置のないものは全くないのである。郵便を一つ入れに出る。歸る時には、必ず鍵を出して錠を外さぬと、家の大戸は開かぬのである。夜になると、其の大戸に内から錠を下す。鍵がなくては外からは如何にしても開かぬ戸であるが、猶用心の爲に更に錠を下すのだと見える。錠が下りた後は外から鍵を入れて、一回半廻さぬと戸は開かぬ。鍵の生活に慣れぬ私は此の大戸の鍵の用法に就いて容易に要領を得ないので、暫くまごついた。同宿の某君は嘗て鍵を忘れて、遂に一夜をホテルで過したことがあつたと云ふ。

巴里に來て、始めて西洋の旅館に泊つた。私の部屋は戸を閉ぢると、鍵がなければ、外からは開けられぬ。それだのに内から又錠をおろす爲に、別の鍵が備へつけてあつた。西洋は個人主義の國である。それ故、厚い煉瓦の壁で部屋を圍み、出口に重い戸を設け、戸に丈夫な錠を下し、籠居する時は、外からどうしても窺ふことが出來ぬやうにしてある。如何に親しい間柄の者でも他人の室に入るには、まづ戸をたゝく、すると、内に居る人が「這入れ。」と應じる。其の聲を聞くまでは、今呼んだ下女も、決して其の戸を開けないのである。

日本は家族主義の國である。そして、日本の家族主義が、西洋の個人主義と甚だしく差異がある如く、日本人の住居の

様子は、甚だしく西洋人のと相違して居る。錠を下した重い戸の代りに、日本では紙一重の障子で部屋を圍んで居る、出入自由である、共同主義である。たとひ、一軒の家が五間になつて居ようと、十間になつて居ようと、實は一間の家である。五間・六間乃至十間の室が、離れるやうで、卽くやうで、茫然・漠然と自ら一家を成して居るのが日本の家である。此の家は實に日本獨特のものである。夫婦を始め家族一般、相倚り相信じて一體を作し、其の間に一點の祕密をも存せぬ所が、日本の家族と云ふものゝ精神である。此の精神を建築で現せば、卽ち日本流の家屋になる。錠をおろした戸の代りに紙で貼つた障子になる。西洋にも日本流の家屋は造り得られる。併し、例へば巴里の眞中にそんな家を造つても、之に住まひ得る巴里人が居ない。西洋人は室を有つて居る。併し、西洋には家がない。家を有つて居るものは、今日の世界文明國中、日本人だけである。

（祖國を顧みて）

七　旅館

厨川白村*

日本で日本風の旅館に泊る事は、私たちに取つては確かに不愉快な事の一つである。もつと極端に云ふと、景色の美しい此の國で、そして樂しかるべき筈の旅行をしながら、私たちに不愉快な感じを起させる最大の原因は卽ち旅館で

*英文學者。文學博士。京都帝國大學教授。大正十二年歿す

ある。旅館と客との誤れる關係である。詳しく云へば旅館と客との關係が、純然たる物質主義・算盤勘定の合理的基礎の上に立つてゐない事である。

西洋のホテルに飛込めば、先づ日本の帳場格子に相當すべきオフイスに行く。一晩幾圓の室で、一人床、浴場附き、何々と、此の方の望むやうな部屋を注文すればそれで濟む。番頭がじろ〳〵人の服裝や人相を見たり、甚だしきに至つては知人の紹介がなければ泊めないといふとか、敝衣破帽の客で、多額の茶代も出しさうにないのは、隅つこの穢い部屋に通すと云ふやうな不都合は斷じてない。旅館と宿泊者との關係が、純然たる、そして露骨な賣買關係であり算盤勘定であるから、豫め帳場で契約を定めれば、それ以上の面倒がかゝらないのである。そして出立の時はまた帳場に行つて勘定書を取つて、それだけの金錢を支拂へば濟む。洗濯代も料理代も何もかも明細に書き付けられてゐる。茶代と云ふ愚劣な物は、絶對に鐚一文と雖も受取りもしなければ拂ひもしない。

それならばホテルの者は、宿泊客に對して冷々淡々、恰も路傍の人を遇する如き者かと云へば、決してさうではない。また客室を壁で仕切り戸に錠を卸して置く構造は、如何にも個人主義的だから、客と客との間にも親みがなく、止宿してゐる事が不愉快かと云ふに、さうでもない。これと反對

に、日本の旅館の各室は襖障子の仕切りだけで、如何にも全體が家族的・融和的なるが如き構造でありながら、實はあの襖障子が鐵筋コンクリートの壁よりも嚴しい冷かな仕切りになつてゐる。そして皆の泊り客が集つて、親しく四方山の話でもしようと云ふ廣間の設備さへして無い。たまに廊下などで他の宿泊者と落ち合つても、「人を見たらば泥坊と思へ。」と云はんばかりの顏をして、お互に睨み合ふだけだ。西洋のやうに旅館の談話室で、見ず知らずの旅の人たちが睦まじく語り合ふと云ふやうな溫みは少しも見られない。個人主義から出發してそれが徹底した其の結果は、溫情的になるのが西洋のホテルである。忙しさうな番頭や支配人までが、閑散な時には出て來て客と世間話もする。珍しく日本人でも泊つてゐるのを見れば、誰彼が來て突飛な奇問を發しては談笑すると云つた風。長逗留をして親しくなれば、一緒に食事へも出掛けるなどと云ふ友愛關係が出來、溫情が湧き、情愛が生まれる。

日本の旅館では、何だか親類か知人の家にでも泊り込むやうに、最初から金錢の事などは問題にして居ないと云ふ風を裝うてゐる。茶代と云ふ一種の贈物を拂ふと、その返禮に、手拭はまだ好しとして、土地の名產と稱する大きな漬物樽や菓子箱を出發の間際にくれる。主人や番頭が出て來て、眞の溫情も友愛もない紋切形の挨拶と云ふものを述べ

る。その關係は友人關係であるかの如く、贈答關係であるかの如く、飽くまで待遇懇切を標榜するかの如くにして、實は帳場でこつそり算盤を彈いて、それから割出したものだ。その友愛、その懇切、その溫情には少しの溫かみもなければ旨味もない。だから不愉快なのである。

西洋のホテルのは、物質から湧いた精神である。物から出た心である。殺風景な權利義務の關係から湧出た溫情である。日本の旅館の場合は、まさに其の反對を行つたもので、狼に羊の皮を被せてゐるのではあるまいか。

（象牙の塔を出て）

ことばづかひ

「和歌こそ猶をかしきものなれ。あやしの賤山がつの所作も、言ひ出づれば面白く、恐しきゐのしゝも臥猪の床といへば優しくなりぬ。」と兼好法師は書きたり。

げに一つ物にても、「かたつむり」といへば優しく聞え、「でゝむし」といへば滑稽に思はる。同じ事にても、「露が垂る。」といへば美しく、「汁が出る。」といへば汚なげなり。「某の人は活潑なり。」といへば快く聞え、「おてんばなり。」といへば聞き憎し。

されば和歌のみならず、平日の言語・文章皆詞づかひにより て優美にもなり、粗野にもなり、人の心を愉快にもし、不快にもするなり。交際家などが、一粒えりの辭を使ふ。といふこ

とは屢、聞く所なり。されど其の時に臨みては一粒づつ選ぶ暇なかるべければ、平生より心がけて修練しておくこと必要なるべし。

詞遣ひは上品なるべし。上品とは氣取ることに非ず、むづかしき詞を遣ふことに非ず、敎育あり修養ある先輩に倣ひて、純良なる日本語を體得し、務めて野卑なる詞を去るにあり。例へば、今の青年女子の間に流行する「有つてよ。」「無くてよ。」といふてよ式の詞は、打解けて愛すべき態なきに非ざれど、未だ社交上の詞として上品なるものにはあらざるべし。「すてき」といふ語は純然たる男子語の而も上品ならざるものなるに、いつしか妙齡の女子も之を用ひんとせるは、心あ

る人の痛く顰蹙する所なり。

田舍詞なりとて必ずしも下品なるに非ず。古語は田舍にありとは國學者の常に言ふ所なり。普通の口語に、「落ちる」「捨てる」といふを、九州にては、「落つる」「捨つる」と言ふ處多し。これ古き語なり。東北にて、「何ちふ物」などいふ「ちふ」も古語なり。されども國語は統一する必要ある故、常に帝都の語を標準とし、隨つて吾等は東京語を標準とす。反對に東京語は往々地方語を混入し、互に平均する傾あり。

漢語・洋語を多く用ふるは斟酌すべしと雖も、學術上に、「引力」「習慣性」などの漢語を使ふは已むを得ざることなり。青年學生の相會して、「痛快」「猛烈」などの語を連發するは自ら別事

なり。學友間には練習のため特に外國語を語ることあらん。是等の場合を除きては、妄りに漢洋語を多く列ぬるは、男子にても「知つたぶり」の非難を免れ難く、殊に溫良の人品を害し、時としては一座の不快を招くことあり。

詞は間接に婉曲に言ひ廻すかた味ある場合多し。「わるい事」といふべきを「よくない事」といひ、「嫌ふ」を「好まぬ」といふが如きは詞に餘裕ありて聞きよし。京畿地方にて「參ります」といはずして「よせて戴きます」といふはこの類なるべくや。」

日本にては敬語の用ひ方甚だむづかし。例へば物なれぬ人は吾に屬すべき卑下の詞「參る」「申す」「致す」等を敬稱と混じて他人に用ひ、「あなたも參りましたか。」などいふことあり。

或は敬語を多く用ひ過ぐることあり、落語家は極端の例を以て「御座り奉る」など云へり。高貴の人に對しては、新聞紙などにも兎角此の誤多し。令旨・行啓・還御などの語は平人に用ひざるものにして、其の儘已に敬語なるを、更に敬稱して御令旨・御還御などいふはまた此の類なり。

是等の事は皆詞遣ひの技巧に關する者なり。其の他情に關する者にして更に大切なるものあり。老人の前には老衰を語らず、病人の前には重病を語らず、或は容色・衣服・財産等何事に就きても、注意して對手の心にかくべき事を避くるは、皆紳士・淑女の高尚なる同情なり。

昔*在原行平卿は文學・政治の器量一世に秀でたる人なりし

*寛平五年歿す。

が、光孝天皇の芹川(一)の行幸に供奉し、豫ねて其の翌日辭職退隱せん志ありければ、狩衣に鶴の繪を刺繡せしめて老後のはで姿をなし、

翁さび人なとがめそ狩衣、
今日ばかりとぞたづも鳴くなる。

と書付けしに、生憎に天皇も御老年にまし〳〵ければ、御氣色宜しからずして、御遊の興も醒めたりとかや。

(一)山城國葛野郡に在る。小倉山から出て、桂川に注ぐ。仁和二年十二月光孝天皇行幸したまふ。

九　徳川(二)光友の室

上

長局の方俄かに物騒がし。「あれよ〳〵。」と叫ぶ聲、ばた〳〵と走る音。たゞ事ならずとおぼゆ。

夫人は居室に在り。悠然として騒がず、徐に侍女に命じぬ。

五條を召せ。

老女五條は召に應じて來れり。顏色青ざめ、呼吸忙し。

何事ぞ。

夫人の言葉未だ畢らず、五條は早くも口を開けり。

一大事の候。只今、中山茂兵衞、奥女中を刺殺し、血刀を提げて部屋々々を騒がし候。あれ〳〵、あのやうに騒ぎ居り候。こゝにおはしましては心元なし。早々御動座遊ばさるべし。

夫人はきつと五條の顏を見遣りぬ。

(二)尾張の國主。元祿六年歿す。

それしきの事、なに一大事と云ふべきぞ。茂兵衞は亂心せりとこそ覺ゆれ。當番の男どもやがて取鎭むべければ、構へて騷ぐべからず。そこに居よ。何の周章つる事かある。

夫人は端然として座をも動かず。茂兵衞は間もなく庭中の井戸に身を投じて果てけり。事乃ち已みぬ。

中

一年は夢の如くに過ぎぬ。

去年の今日は茂兵衞の奥女中を殺しゝ日に候はずや。あの時の恐しさ、今に忘れ候はず

侍女等次の室に在りて、當時の事ども語り合ひけり。折柄一天俄かに搔曇れり　風捲き、雨奔り、電閃き、雷轟く。天色黯澹として、晝なほ夜の如し。

侍女等は顫ひ戰きぬ。夫人は平然として常の如し。忽然として火柱立ちぬ。轟々として天地も碎けんばかりに鳴りはためきぬ。先に茂兵衞の投ぜし井戸に雷の落ちけるなり。

侍女或は倒れ、或は氣絕す。夫人は自若として神色平生の如し、

下

人はこゝに投じ、雷はこゝに落つ。

不吉の井戸は埋めんこそ好けれ。

奥役の議は忽ちに決しぬ。

夫人は大久保金兵衛を召して諭せり。

雷の落ちたる井戸を不祥なりとせば、此の邸、此の庭、亦皆不祥として改むべきにあらずや。井戸は底を浚へ水を替ふれば、子細なきものぞ。舊き井戸を塞ぎて新しき井戸を穿つは、人を勞するのみにて、何の益もなき事ぞかし。

金兵衛其の理に服しぬ。埋井の議乃ち止みぬ。夫人の言ふ所理義極めて明白、人をして爭ふ辭なからしむ。識見雋邁なるにあらずんば、能はじ。賢夫人と謂ふべし。

一〇　時間

ナポレオンは最も善く時間の大切なるを知れる人なり。その比類なき大功を奏したるも、多くは時間の使用その妙を極めしがためなり。嘗て墺地利軍の敗北を嗤つて曰く、「かれらは五分時間の價幾何なるを知らざるがために敗れたるなり。」と。この時間の英雄ナポレオンもワーテルローの大戦*に於て、自ら時を誤りたると部將グルーシーの遲參したるとによりて、一敗地に塗れ了んぬ。

「思ひ立つ日が吉日」とは成功の祕訣を敎へたる名言なり。思ひ立つやいなや直ちにその事に取りかゝれば、興味涌くがごとく、わが身の勤勞に服しをるを忘れて、たゞ快樂を取りをるを覺ゆるのみ、從つて、事業の進行も自ら速かなり。

*西暦一八一五年六月十八日。

もし思ひ立つ日に始めざらんか、當時の興味は索然として消失し、他日これを始むるに非常の困難と痛苦とを感ずるのみならず、成功の一段に至つても、卽時に着手したるに劣ることあるを免れず。故に、某大商店のごときは規則を設けて、「郵書は卽日に返答すべし。」と定めたりといふ。事をなすは種子を蒔くがごとし、一度その時を失ひては、終にこれをなす能はざるなり。(一)ヘラクリトス曰く、「汝は同じ河水を以て再び沐浴することを得ず。」と。これ、河水は流れて息まず、時は往いて還らず、大事も興味も元氣も熱心も一度去つては復得べからざるをいふなり。(二)ウォルター、ローリーは僅少の時間を以て多くの事を成し

(一) ギリシヤの哲學者。紀元前五百年頃の人。

(二) 英國の航海家。1552—1618

たる人なり。その術を問へば、卽ち曰く、何事にても、なさねばならぬことは、直ちに之をなすにあり。」と。あゝ、これ語淺くして意深きものにあらずや。世の失敗者を見よ。多くはこれ明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半の嵐に吹拂はれて、茫然自失せるものにあらざるはなし。(一)鐵は熱せられてなほ紅きうちに打つべし、枯草は太陽の輝きをる間に乾かすべし、事は時機を失はずして始むべし。古より大人と呼ばれし、(二)豪傑と稱せられし人は、大抵みな分陰を惜みて機會を捉へし人なり。

時を誤るものは責任を誤るものなり、斷じて世間の信用を受くることなし。(三)ウォシントンの書記、一日遲刻せり。辯

(一) 明日ありとおもふ心のあだ櫻、よはに嵐の吹かぬものかは。

(二) 米國の大統領。1732—1799

疏するに、己が時計の後れをりしを以てす。ウォシントン直ちに告げて曰く、「汝は正確なる時計を買ふべし。さなくば、余は他の書記を傭ふべきのみ。」と。(一)フランクリン常に遲刻勝なる奴僕を嗤つて曰く、「善く辯解する人は何にも役に立たぬ人なり。」と。(二)ネルソン、或時、軍艦に乘らんとす。その前夜、御者來りて、「明朝正六時に馬車をまはし申すべし。」といふや、彼は曰く、「それより十五分前に來るべし。一定の時より十五分前にあるは、余が余たる所以なり。」と。ナポレオン、一夕、諸將を晩餐に招く。期に及んで諸將なほ來らざりければ、彼は一人にて食事を始めたり。將に食卓を離れんとせしときに、諸將漸く來りしかば、彼點頭して曰く、「諸君、已に食事は濟みたり。請ふ、各自の職務に服せん」と

(一)米國の政治家。1706—1790
(二)英國の提督。1758—1805

凡そ、時間を大切に守るは、勤勉の習慣を生じ、責任を盡し、義務を重んずる所以にして、身を立つる基なり。（「立身策」に據る）

二　修善寺より

尾崎紅葉

再啓。昨日は雨の日暮し無聊に困しみ、夕景始めて傘擎して川向ふの小山なる賴家公の墓を拜し申候。「時政爺の邪慳何ぞ今に執着して假さゞることかくの如きや。」と見るもいたはしの荒涼たる藪蔭に空しく一片の殘石を留めて、慘禍を生前に極め、恥辱を末代にさらされ候事、御身一たびは征夷大將軍の顯榮にものぼり

(一)名は德太郎。文學者。明治三十六年歿す。
(二)桂川の向ふ。

たまひつる御運にして、如何なる前世の御宿業にかはしけんと、低回去るに忍びかね候。

墓畔に尼將軍建立の一切經堂あり。是こそ公の奥津城にして、現在の五輪塔は、後人の御墳無きを慨きて假に建てたるものなりとの考證これあり候。されば右の經堂の大破、安置せる丈六佛の朽廢、亦決して懷古の暗涙を斂めしむべきにあらず候。蒲*冠者の墳は未だ弔はず、すぐ、隣に候へども修禪寺にも參詣致さず候。追つて一見の上申上

尾崎紅葉

*源範頼。

ぐべく候。

此の日は一日閑居の餘り入浴七度に及び、剩へ連夜の按摩尤も勁く、全身綿の如く相成り、疲勞度に過ぎて終夜眠る能はず、黎明始めて交睫して覺えず十一時に至り候處、快晴の天氣玲瓏玉の如く、踊躍して獨*鈷の湯の撮影を試みんと逸り候程に、過りて三脚柱の腰部をへしをり、尠からず當惑致候へども、應急の手術を施し、やをら

*桂川の川中に涌出づ。

修善寺獨鈷の湯

湯の上流の淺瀨に蹈入り、ピント合せ候が、ひまどり候程に水中の赤脚寒に堪へず、而も來浴者頻々として然るべからざる處に立騷ぎ、或は目障の邊に着物を脱ぎはなしなど、始終ピント安を妨害致候爲、技師の難澁これに過ぎず候ひき。辛うじて一照致候へども、印畫の安否甚だ心許無く存候。

それより去りて川下なる廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる坂道の中段に機械を立て候處、崖下なる馬の湯に上下する四足の往來ありて、屢、これに道を讓るべく餘儀無くせらるゝため、倥偬の間に速寫機を拈りて立退き申候。

横濱にある菓子の老舗。

此の寫眞修業の前、人の需によりて少々麁筆を揮ひ申候。然るに僻境の惡箋用ふべからずなど不足を申候處、亭主の才覺、紙門に貼りのこしの地紙裁ちて持來り候に、居然たる檀紙金砂子の好短册を得候こそ風流この上なく、感心致候へ。

二日の雨にて椎茸出來候へば、味醂醬油の附燒に致候。今は春子のすがれにて、肉薄く、氣も亦微には候へども、山厨の佳味侮るべからず、平椀中、常に幅する所の陣笠の如き物とは箸を同じうして論ずべきにあらず候。

本日は食福の日にて、午後には合宿の衆より炒豆・草餅を貰ひ、夜に入りて友人より新杵の一折を贈られ候。

胃病の人、毎に餓鬼の如し。幸に食談の煩を咎め給ふなかれ。草々不盡。（紅葉書簡抄）

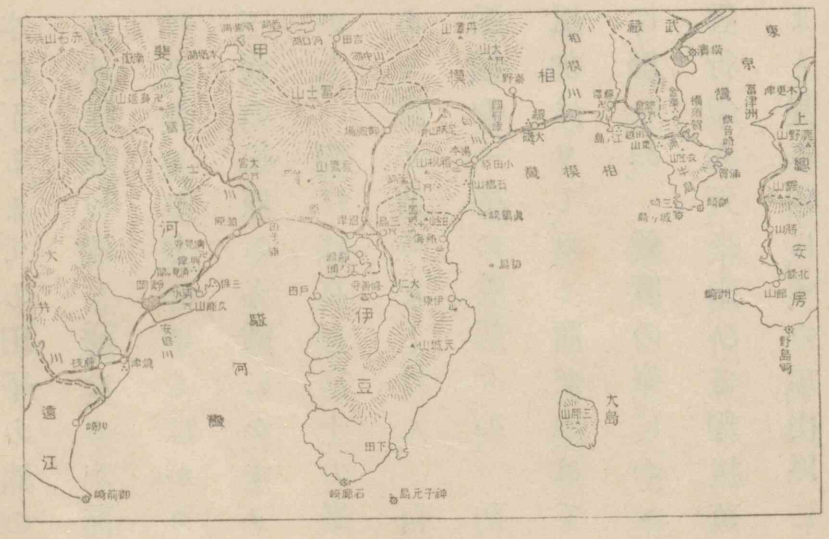
一三　十國峠の眺望

高山樗牛[一]

十國峠[二]の登臨は記念すべき壯快の遊なりき。この峠は函嶺より天城に連なる所謂富士火山脈の一峯にて、頂に登れば關の東西より豆州の沖かけて十國[三]・五島を眺め得べしとぞいふなる。或日の空晴渡りたるに嘲風[四]と此に遊びき。山の頂は熱海より五十町を出でざれば、いと高しとは言ひ難し。されど、相・駿二州に跨りて、北は足柄・箱根・富士、南は天城・神子より大島・三宅の山々を望み、西は江の浦・靜浦を眼下

（一）名は林次郎。文藝批評家。文學博士。明治三十五年歿す。
（二）伊豆にある。
（三）伊豆・相模・武藏・安房・上總・下總・遠江・駿河・信濃・甲斐、大島・三宅島等
（四）樗牛の友人姉崎正治。

天津少女
天津安



に見おろし、田子の浦づたひに、清見が關より三保の松原かけて、遙かに遠江の御前崎に至るまで、東は眞鶴が崎のあなた、小田原・國府津・小淘綾の磯邊に、江の島、鎌倉の山々より田越・三崎のはてに至るまで、相模灘を包みて、かすかに安房・上總の遠巒を望む。景物の壯大、類ふべきものなし。

殊に美はしきは、江の浦より清

廣島縣安藝

水に至るまでの田子の浦の景色なり。富士の裾野を縫へる小松原の濃き綠なるが、蒲原・興津わたり淡き紫に薄れ行けるさまなど、心ゆくばかり嬉しく、天津少女の天降りけん三保の松原の春霞にかすめるが、この世ならず見ゆるも、ゆかし。仰げば高き富士の峯の千古の姿は、言ふも愚かや。あゝ、誰が造りなしけん。自然の姿の美しさよ。

函嶺の一峯に雲起りぬ。初は膚寸の大さなりしが、谷開け、風加はりて、漸く廣がり、はては八峯の全部を掩ひて、西の方に靡きぬ。愛鷹の峯にかゝるころ、富士颪に逆ひたるにや、雲行忽ち天に向ひて劒拔萬丈、二山の間に白雲の壁を築くよと見る内に、その頂、山風に散じ、驀然として滿天を覆ひ來りて、四顧濛々、咫尺を辨へず。余は衣襟を合せて凝視すること多時。嘲風は杖を揮つて天を劃し、快哉を絕叫すること三たび。須臾にして、空晴れて、函嶺の崔嵬、富岳の清容もとの如し。滿天の雲霧、余、そのいづこに行きたるかを知らざりき。（柳牛盃集）

一三　筆の歌

武島羽衣*

月花めづるみやび男が
向ふ机の紙のうへ、
走れば、やがて、歌成りて、
星照り、日出で、鳥歌ふ。

*名は又次郎。國文學者、詩人。文學士。日本女子大學校教授。

天地ゐがく繪だくみが
倚るや南の窓の下、
動けば、やがて畫は成りて、
水落ち、木生ひ、草青し。

壯心鬱勃天を衝く
英雄の手に觸るゝ時、
落筆のもと龍蛇とび、
雲煙くらく地を蔽ふ。

慷慨淋漓怒髮立つ
志士のかひなに執られては、
片言隻句鬼神泣き、
哀音ながく世に傳ふ。

功成り、名とげ、業卒へて、
身は棄てらるゝ竈の中、
煙と化して消ゆれども、
恨みぬ筆の心清しや。

一四　マヂソン夫人

下田歌子*

*女子教育家。實踐女學校長。

ジェームス、マヂソンは結婚後數年にして北米合衆國の內務卿となつて華盛頓府へのぼつた。マヂソン夫人は天性溫和で、愛嬌があつて、辭令に巧な人であつたから、誰でも夫人に遇つて愉快を感じないものはなかつた。マヂソンが時の大統領ジェファーソンを助けて衆望を集めたのは、重に夫人の力によつたのであつた。

マヂソンは性質が極めて剛直で、どちらかと云へば、一寸冷淡に見えて、他より畏敬こそされるが、悅服される德には乏しかつた。之に反して、夫人は如何にも溫和な愛嬌のある人で、そして、思ひやりの深い慈悲心に富んだたちであつたから、丁度夫の短所を補つて大に其の事業を助け得たのである。マヂソンの反對黨でも、一度夫人に接すると、忽ち其の反抗の鋒が折れて、遂には敵對することが出來ぬやうになつたといふことである。

マヂソンはかくの如き良妻の內助を得て、遂に前後二回大統領に選擧された。滿八年の在職中、或は內憂外患こもごも至つて、其の勞苦・困難は一通りでなかつたにかゝはらず、幸に內には夫人の慰藉あり、外にもまた夫人の助勢を得て其の難局を切開くことが出來た。

任滿ちて、めでたく鄕里ヴァージニヤ*のモントピリアーと云ふ處に退くや、此處に廣い邸宅を構へて、高年の母と共に住つた。ある時、某夫人がマヂソンの母を訪問すると、九十

*北米南大西洋區八州の一。

五歳の老嫗は眼鏡をかけて編物をして居た。夫人は老嫗にむかつて「御退屈ではお出なされませぬか。」と問ふと、老嫗はほゝ笑んで「いゝえ、お蔭で少しも退屈いたしませぬ。まだ編物や書物が伽をしてくれますから。それに、母が能く私を慰め、又、手となり足となつて私の思ふとほりにしてくれますので、一向困りませぬ。」と云つた。その夫人は驚いて「えゝ、あなたの御母様。それはどなたで。」と眼を見張つて尋ねると、老嫗は「あれ〳〵、彼處に。」と指さす。

見ると、嫗のマヂソン夫人が濡れた手を白い前垂でぬぐひながら、今隣室から出て來る所であつた。ホワイトハウス*で華やかに着飾つて居た頃に引替へて、粗末な地味な衣服、

*北米合衆國大統領の官舎。

臺所の用でもして居たかとおもはれる扮裝。まるで純然たる農家の主婦であるが、その氣高さ奥床しさに、客の夫人は驚き感じて、暫時嫗と姑とを等分に見比べて居ると、兩人は顔を見合せてほゝと笑つた。なる程老嫗が母と呼ぶのも無理は無い、夫人の態度は慈母の愛兒を視るのと少しもかはりがなかつた。

で、其の夫人は、歸つてから、人に語つて、「マヂソン夫人は交際に巧な、快活な圓滿な人として世に響いて居るが、私は却て一農家の主婦として能く其の家政を理め、能く其の姑に事へるところの天晴な良妻として見た方が遙かに貴いと思ふ。誠に花の美なるは實の佳なるには及ばぬ。」と感嘆した

といふことである。（良妻と賢母）

一五　樂地

幸田露伴*

*文學者。文學博士。

如何なる處にも樂しき處はあるべし。又、如何なる處にも樂しからぬ處はあるべし。花笑ひ、鳥歌ひ、天長閑に霞み、水緩やかに流るゝ春の日に當りても、心よき事のみ懷に滿つべくはあらず。朝の曇には雨を疑ひ、夕の風には寒に怯ゆることもある例なり。雪雲の日を障へて暗く、大地凍りて土に生色なく、人畜共に萎屈む冬の時に當りても、うら悲しき事のみの胸を塞ぐといふにもあらず。或は水仙の一二輪に清き優しさを感じ、或は暮鴉の三四聲に寂びたる趣を覺え、木の根焚く山家の爐のほとりに罪なき話の興を涌かし、ぬく灰はたく煨芋の煖きに笑むをかしさもあるべし。金殿・玉樓にも樂しからぬ折はあるべく、茅店・草屋にも樂しき處はあるべし。

此の世は我一人のために設けとゝのへられたるものにあらず。されば、親としては、我が子をも飽かず思ふことあり、子としては、我が親をも物足らず思ふことあり、人を使ひては、齒痒くもどかしく思ひ、人に使はれては、腹だたしく不滿・不快に思ふことあるも、免れ難き世の習なり。まして、身貧しく、學乏しく、よろづ心に任せぬ者などに在りては、いつも口惜しく、あぢきなく、樂しからず思ひて、「我が如く苦しき目

をのみ見て生きながらふる者もあらじ。」など、身をも棄ててんほどまでに、或は恨み、或は嗔り、或は憂へ悲しむこともおのづからあるべし。されど、其の人より言へば、窮苦の底の底に沈みて、右へも左へも行くべき道のなきやうなれども、他の人より言へば、かう〳〵したらんにはよかるべきものをと思ひ、或は、また、少しは樂しきかたもなきにはあらざるやう思ひ做さるゝこともあるべし。

事物は大凡只一向ならぬものなれば、樂しからぬが中にも、樂しき處、樂しむべき處もあるべければ、樂しき處、樂しむべき處を見出し得ば、如何ほど窮苦・不快の中に在りとも人は自ら勇氣を得て、苦中の苦に堪へ、やがて人上の人となり得

ることもあるべし。さなくとも、樂しからぬがなかに樂しき地を見出さんことを心がけて、其の習慣を我が身につくる時は、朝夕に心も闊く氣も裕かになりて、おのづから人品も宜しくなり、分別も正しくなり、世をば樂しく過すやうにもなるべし。されば、人は務めて樂地を見出す習慣を身に賦せんと心がくべし。

むかし、或江州の行商人と、他國の行商人と共に碓氷*の坂路を登り行きける折、夏の日の烘くが如く熱きに、商ふ品嵩高にて且重かりければ、二人とも憊れ、苦しみて、憩ひけるが、苦しさの餘りに、江州のならぬ商人、碓氷の山の今少し低くもあれかし。身すぎの道に苦しからぬはなけれど、かばかり

*上野國碓氷郡と信濃國北佐久郡との交界。海拔三一三五尺。

高く峻しくては、行商を廢めて歸り去らんとしも思ふなり。」と溜息つきて歎じけるに、江州の商人打笑ひて、「坂も同じ坂なり、荷も同じ程なれば、御身の苦しむほどは我もまた苦しみて、かく息も喘ぎ、汗も流るゝなり。されども、我は然おもはず。此の碓氷の山を十程も重ねたる高き山もあれかし。さらば、數多き行商人は、皆半途より身も憊れ心も弱りて、歸り去るべし。其の時、我一人如何にしても山の彼方に到り、思ふがまゝに商賣して見んとは思ふなり。碓氷の山の高からぬこそ口惜しけれ。」と云へりとなり。同じ艱苦の中に在りても、よく樂地を觀るものは、身撓んで、心撓まず、力衰へて勇衰へず。一路兩人、一境兩狀。よく〳〵思ひ味はふべきなり。（洗心錄）

評論家。東北大學教授。

一六　自省

阿部次郎

一

他人の長所を認めてこれを尊重し、いたはり、助成することは、雜り氣のない朗かな歡である。しかし不幸にして我等が眼を開いて他に對する時、我等の瞳にその影を落すものは、他人の長所や美點ばかりではない、その弱點や短所も、亦否應なしにその黑影を印象する場合がある。その時この餘儀ない印象をいかに取扱ふべきか。この問題が自分にとつては一苦勞である。

その缺點が甚だしく重大な致命的なものでない限り、これをむきになつて憤慨したり、これを自分に加へられた傷害として不愉快がつたりする心持からは、自分は可なり遠ざかつてゐる。この弱點を捕へて、それを玩具にして、からかつたり、すぐつたりする惡戯氣も、近頃は隨分少くなつて來た。自分は對手の弱點を自分一人の腹で呑込んで、默つてこれを看過してしまふか、若しくは好意ある微笑を以て、對手がその弱點を始末して行く自然の經過を見護つてゐるかすることが出來るやうに思ふ。さうして必要に應じて適度な忠告と暗示とを與へて行くことが出來るやうに思ふ　對手の長所を重んじて、これを助成して行くことに

中心の態度を置く限り、多少の缺點を寛容することは、そんなに困難なことではない。

しかし、自分は自分の友人に、彼は自分の缺點を呑みこんで知らん顔をしてゐるといふ印象を與へることを恐れる。自分は無意識の間に自分が對手の弱點を脅す態度をとつてゐることを恐れる。その人に十分な信頼を寄せてゐる場合でない限り、他人から呑みこまれてゐると思ふことは、決して心持のいゝものではない。自分は他人から十分に信頼される資格を自分に許すことが出來ないから、自分が對手の缺點を看過して默つてゐることが、却て對手に不安の念を與へることを恐れるのである。若しN*先生のやう

*夏目漱石。

に、對手の弱點に對する不同意を卽座に卽刻に發表して、しかも少しも相互の親愛を傷つけずに行くことが出來たら、自分はどんなにせい〳〵することであらう。しかし現在のところ、自分にはそれが出來ない。自分は對手の缺點を感じながら、或時が來るまではこれを自分の腹の中に藏つて置く。さうして特別に或靜かな時を擇んで、出來るだけ和かな言葉を以て對手に忠告する。現在の自分には、これ以上のことは、德が足りなくて、企て及ばないのである。凡そ言へないことがあるといふことは、人と人の間に在つて決して喜ばしいことではない。然るに自分には、時として對手に言へない心持がある。若しこの沈默が善良な意志から出てゐることを信じ得なかつたら、自分はさぞ氣詰りな人に見える事であらう。只自分の善良な意志を信ずる事が出來る人のみ、自分の友達となり得るのである。

さうして更に悪いことは、自分の輕々に看過したつもりでゐる缺點が、其の實自分の心の底に引掛つて、對手に對する輕蔑若しくは怒を構成してゐる場合があることである。自分は時として意識的に、その人の長所を見ながら—若しくは見ようと努めながら、無意識の間にその人を輕蔑してゐることを發見する。この矛盾を發見することは、自分にとつて特に苦い經驗である。

この間Xが來て、Yの書いたものゝ話をした時、—Yの書い

たものゝ不合理を指摘してこれを笑つた時、自分はどうにかしてYを辯護しようとした。一見明かに不合理なYの言葉を、どうにかして助けるやうに解釋してやらうとした。しかし悪い事にはXの話を聞いた時、自分も高々と笑つたさうだ。しかもなほ悪いことには、自分は自分が高々と笑つたことにまで氣が附かずにゐた。自分は言葉でYを辯護して心でYを笑つたに相違ないのである。氣取らうとして、益、桁を踏外すYの態度を笑つたに相違ないのである。もとよりYを辯護した自分の言葉が虚僞の言葉でないことは、誰よりも自分自身が最もよくこれを知つてゐる。しかしそれはいかにも底の淺い言葉である。輕蔑と肩を並べた好意、痛罵にも劣れる好意を、Yが喜び得ないのはもとより當然である。自分はこのやうな好意がYと自分の間に好意として通用し得ないことを熟知してゐる。自分はそれが好意として通用し得る日が來るまで、沈默してこれをしまつて置かなければならない。さうして努めて彼を痛罵する方の一面に力を入れなければならない。痛罵の段階を經なければ、自分の彼に對する好意はいつまでも生きて來ないであらう。

二

妻は、自分の我儘を洩す唯一の拔路になつてゐる。不機嫌な時、無理がいひたい時は、自分は何時も其の相手を妻に求

めてゐる。其の爲に我等の間には一種の氣安さがある事は事實である。併し妻の身になつては隨分堪へ難いに違ひない。而も自分はこれを償ふだけの事を、妻にしてやつて居るであらうか。それは頗る疑はしいのである。

此の樣な我儘な氣儘な氣安さの相手とせずに、假令他人に對する時のやうに、遠慮まではしなくても、一種の抑制と思ひやりとを以て之に接した方がよくはあるまいか。寂寥や焦燥や不機嫌や―凡て內面に喰入る孤獨を男らしく自分一人で堪へ凌いで、せめて妻をいたはり慰めるだけの隔りを保つて行くのが道ではあるまいか。（三太郎日記）

一七　おまんの方

太閤秀吉公の御簾中は、信長の足輕たりし杉原入道といふものゝ娘なり。幼年の時はおまんといひて、尾州にて信長の家中奉公を勤め居たり。

信長の馬廻に伊藤右近といふものあり。おまん出生の時より此の右近方にて世話致し遣はしける故、始終右近が世話にて彼方こなたを勤め居たり。信長の十人衆目付役の內なる岩卷一若といふ者の方に勤め居たる頃、木下藤吉は未だ足輕にて、*うこぎ長屋といふ處に住めり。藤吉其の頃、妻を離別して後妻なければ難澁に及びける故、「何とぞ岩卷が方に居るおまんを妻女に求めたし。」といひ入れけるに、お

*うこぎ垣ありて內に長屋がある。一間に仕切つて足輕の住む處。勤の暇にはうこぎを摘んで賣つたといふ。

まんは早速に返事もせずして、まづ伊藤右近が方へ行きて相談に及びけり。右近申すには、「彼の藤吉といふは名高き發明なる者なれば、末々の爲にも宜しかるべし。支度は我が方にていたし、夜着・蒲團・鏡・櫛・笄までも遣はすべし。されど知らるゝとほりの困窮なれば、錢金の世話は出來まじ。其方の叔父淺野彌兵衛*へ參りて金子を借り申すべし。彼は勝手よく暮せば、恥かしくとも無心を申すべし。」とて、淺野方へ遣はしけり。おまん參りて金子一兩と木綿一反と鼻紙三折とを貰ひて來りければ右近大いに歡び、夜着・蒲團など洗濯致し、其の外、當分入用の道具なども取揃へ、日柄を選び、きくと申す下女同道にて、藤吉が方へ遣はし、婚姻いたさ

*後に淺野長政。

せけり。

然るに、藤吉だん〳〵と立身出世して、終に太閤秀吉公と仰がれまし〳〵けるをりしも、彼の右近が事を思ひ出され、天下へ觸を廻して尋ねられけるに、をりから右近は處々に隱れ忍び、名を隱してありしが、困窮堪へがたく、飢に及ぶにより て、甲州の加藤駿河守方に客分となりをるよしを聞し召され、右近夫婦とも大阪の城へ呼ばせ給ふ。

さて、御懇の御意ありて、昔の事ども言出したまひ、落涙を催され、繻子の夜着・蒲團に白銀五十枚、鶴の香合といふ名器を添へて、御簾中の手づから右近夫婦に下し給ふ。其の時、夫婦が側によりて「御召物ことの外によごれたり。昔の御禮

に我等洗濯して參らすべし。脱ぎてゆかれよ。」とて、別に着類を賜ふ。右近夫婦古綿入脱ぎおきて、下されける着類を着て退出しけり。十日ほどありて、先日の洗濯出來あがりたりとて、御城へ召され、御簾中ぢきに下し給ひぬ。右近が子孫、今に此の品を傳へて什物となすとぞ。

世には、輕々しき者も段々立身出世して成上る時は、必ず昔の顔をせぬが人情なり。さるが中におまんの方の昔を忘れ給はざる所、感ずるに餘ありといふべし。（「雨窓閑話」に據る）

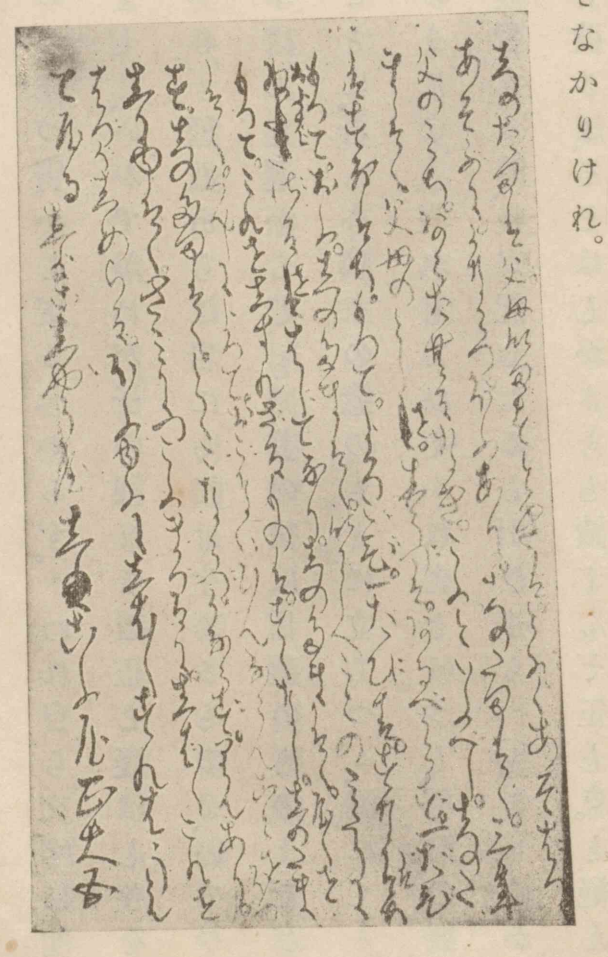
一八　黑井繁乃

年若き女の身にして夫に後るゝばかり悲しきはあらざるべし。しかも此の悲みに堪ふるものはなほ世にあらん。鐵石の貞心、身を終ふるまで之を潔うする者に至りては更に難かるべし　さるをよく之を全うして、貧苦に撓まず、艱難に挫けず、幼き孤兒をおふしたてゝ、家系のまさに絶えなんとするを繼がしめし黑井繁乃の如きは、最も類まれなるべきなり。

繁乃は上杉氏の家臣黑井四郎左衞門の一人娘にして、文化元年七月出羽國米澤なる袋町に生れき。七歳にして、父を亡ひしかば、母の膝下に人となり、後、同藩士湯野川某の三男なる源三郎を夫に迎へて家を嗣ぎぬ。文政六年七月、一子信藏*を生みて、家門の榮えいよゝまさらんとしけるに、げに

*海軍大將黑井悌次郎の父。

禍福は糾へる繩の如く、同じき年の十一月夫源三郎病の床に打臥しけるが、やう〳〵重りゆきて、心こめたる看護のかひもなく、遂に歸らぬ旅にぞ出で立ちける。繁乃は其の時纔かに廿歳、よはひ一つの嬰兒を育むだにあるを、これに加へて頽齡の母はあり、ことに家主人の二代まで引續きて世を早うしければ、おのづから食祿も減らされて、世の活計に事缺くことの多かりけるには、いかばかりわびしくも亦悲しかりけん。世の常の女なりせば物狂はしうもなりぬべし。さるを繁乃は心を鎭めて、よくこの歎きに堪へ、あるは羽織の緒を組みて町に賣り、あるは機織り絲繰りなどして、僅かの賃銀に換へ、よく母に事へ子をいつくしむこと年かさなりければ、遠近の人々、こをきゝ傳へて、ほめ感ぜぬものこそなかりけれ。



黑井繁乃筆假名論語

信藏、七歳のほど、繁乃隣なる糟谷某といふ翁に就きて四書を學ばしめき。されど其の身の、藩士の女のならひとて面

正しき學の道にも入り立たず、たゞ纔かに假名文字知れるばかりなるを恥ぢて思へるやう、「子を賢からしめんとせば、おのれ先づ賢からざるべからず。　われ自ら文字に明かならずして、いかでかわが子の誤れるを正し疑はしきを明め得べき。　種しあらば岩にも松は生ふるものを、いでや今より學ばんも遲からじ。」とて、其の後は信藏のものまなびに行くごとに、吾も亦隣家の窓のもとに立ちつゝ、漏れくる翁の聲のまに〳〵、假名もてひそかに書きうつし、信藏の歸りきて復習する時、わが記したると引きくらべて、「こゝはかくかくと改めよ、そこはしか〴〵と讀まんぞ正しき。」と、絶えず傍にありて教へ導きしが、かくする事二年ばかり、遂に四書を

*土佐日記の歌。

ことゞく寫しはてたりとなん。「世の中に思あれども、子をこふる思にまさる思なきかな。」とか。子を思ふは人の親の常とはいひながら、かくばかり眞心もて其の子をおふし立てしもの、思ふに世にはすくなかるべし。　あはれ今孟母ともたとふべきは、この繁乃なるかな。

その後、信藏は藩の學校興讓館に入り、拮据勉勵して、學業大に進み、十三歳になるまで引續きて秀才の譽を擔ひければ、藩公いたくめで給ひて、黄金あまた賜ひて賞せられき。これみな繁乃が力の致すところとぞいふべき。　信藏ある時、母の記しゝ假名書きの四書の、一字一句母が心血のこもれるものなるを、空しく蠹魚のすみかとなさんを惜しみて、記

念としたまはらんことを請ひけるに、繁乃いふやう、かく拙き筆の跡を殘しなば、なか〳〵に後の物嗤ひとなりやせん。」といなみたれども、强ひて請ひとり、はしがきを添へて、うるはしく綴り合せ、國字四書と名づけて永く子孫に傳へ、以て慈母のめぐみをとこしなへに忘れざるやうなしたりけり。

かくて嘉永六年八月繁乃は病みて身まかりぬ。齡五十歲なりき。

繁乃若かりし程は容姿端麗にて、あてに美しかりけれど、夫に別れし悲みと、老幼を扶くる物思ひと、貧しく足らぬ勝なる苦しさとにて、いたく心神を勞したりけん、中年に至りては、はや毛髮ことゞく白く、齒などもほと〳〵拔けはてたりとかや。

其の頃信藏は學業やゝ成りて家は嗣ぎたりけれど、仕への道も年淺くて未だ志を得るに到らざりければ、すぎはひの不自由もなほ前と異ならず、信藏が當番のため、月にひとたび登城する時の紋服の如きも、止むを得ずつねは質舗にあづけおきて、登城の日の近づけば繁乃は二夜も三夜もまどろまでいそしみつゝ、とかくして錢まうけいでて、信藏に知れぬやうに償ひかへりて打着せたりとぞ。其の程の心づかひ、げにいかばかりなりけん。されば繁乃の身まかりける時、信藏の悲みはいはんかたなく、かくばかり身を苦しめて、われをいつくしみ給ひし海山のなさけ、あはれいつの世にか忘るべきと深く思ひしみければ、後、累進し

て重職に就き、町奉行となりて秩祿二百五十石を食み、戊辰の役には米澤藩の監軍として越後口に轉戰し、明治維新の後は米澤藩少參事に任ぜられ、さてのち辭して藩の支封たる上杉子爵家の家令となりて、遂に其の身を終へしまで、つねに母の艱苦に堪へし心を心として、自ら奉ずること極めて薄く、一生の間、絶えて煙草・茶・酒類を口にする事なく、家に慶事あるごとにはこれぞ母のたまものと、先づ國字四書を戴きて厚く其の惠をあふぎ謝したりけりとなん。

古語に曰く「言ふは易く行ふは難し。」と。百の言ありとも一の行なくばなにのかひかあらん。言は行をまちてはじめて尊ければなり。世進み智開くるに從ひ、徒に言多くして

史記後漢書、易、詩經、禮記、春秋

行鈍きが習なるを、繁乃は言うて行はざるはなく、行ひて遂げざるはなし。三史・五經の道々しき敎は受けざりければ、おのづから聖賢の心をさとり得て、よく孝に、よく貞に、よく慈に、人の最も難しとする所に安んじて、玉となりて一生を全うしたり。其の流風遺韻、まことに、世の人をして感奮興起せしむるものありぬべし。

一九　江*津川

徳富健次郎

「往つてお出でなはりまつせ。」

送つて來た女中の挨拶の中に、ひらりと飛乘つた船頭が纜を解くと、深さ二尺を過ぎぬ清淺の水に身を任せて、舟はす

*肥後國、飽託郡にある。源を水前寺に發する。

るすると下り始めた。八歳の鶴子も四十六歳の余も齊しく歡聲を上げる。陶器の破片すら美しく見らるゝ清流に家鴨噪ぎ、水際の家も秒毎に趣變る面白さ。船頭を呼んで舟を中流に止めさせ、急に寫眞機など取出す。

早、砂取町(一)に來て橋下を潛る。底の礫にさゞめいて居た流は、清いまゝに追々深くなる。水前寺(二)に限らず、此の界隈は何處からでも玉の様な水が涌く。神水(くはみつ)と云ふ村の名もある位。砂取橋を過ぎて、川は野天の下を晴々しく流れ出る。右岸は千萬頃の田を限る一帶の長堤、左は木立の村が斷續して居る。其の間を追々川らしくなつた水がひたすら南へ南へと駛ると、其の水に乘つて舟が滑る様に下つて行く。

(一) 肥後國飽託郡。
(二) 成越園ともいふ。水が清いので名高い。

水棹取つて舟尾に立つ船頭は、唯舵を取るだけである。相變らず水は美しい。水晶のやうに透徹つてゐる。併し、底は砂取前の礫ではない。一面に藻や水草である。あの蔭には幾何の鮒が喰喁して居るだらうかと想はれるやうな美しい藻の床である。長々と深緑の髪を下流へ靡かせ、搖々と氣長に振つて居るのもある。川芹・川みつばの淡緑に戰いで居るのもある。處々水面に浮出て、白い花を泳がせて居るのもある。此等の上を滑り流るゝ水は、唯もう透徹つて、草入水晶其のまゝである。隨分と急に流れるが、藻の上だから、音と云ふ音は少しも立てない。水のまに〳〵舟も沈默を續ける。唯水面に浮いた藻草を其の腹で摩つ

て通る時は、すう、さあ、と幽かな音を立てるのみである。此の野川に稀に趣を添へて、水中に立つてゐる石がある。菰蒲の洲は處々に出没して、幾條にも水の流を分けて居る。十月初旬、青々としてまだ夏のまゝなる其の蔭には、繋ぎ捨てた舟もある。我ら興に乘ずる一行を載せた舟は、今藻草の上を滑り、今菰蒲の洲をかはし、一點の雲もない秋空を映して晴々しく白光りし碧光りする明るい水につと乘りかくるよと思へば、村の木立の蔭蘸す黯綠の水を驚かして駛るのである。水も面白さう、舟も嬉しさう。舟の上の人も樂しく浮かれて、西詩など歌ふ。

能書の筆から流れ出づる假名書きのものにも似て嫋々と

嬌態をつくつて流るゝ水の下手を見やりつゝ、あの眞菰の洲の何方を舟が通るかなど賭をしたりして見る。黄色な花をつけた河骨や白い花の海芋が悠々と汀近く舟を迎へて笑ふ。黑裝束の精靈蜻蛉が横目で舟をちらと見て、水鑑しつゝふら〳〵と舞うて行く。家鴨の一群が、それ來た、刮と、水を搔いて木蔭の方へ逃げる。好い川だ。妻の父ではないが、此の川添に水莊一つ欲しいと思ふ。と思へば、芭蕉など植ゑた、心憎い風雅な別墅が左岸に見えた。（死の蔭に）

二〇　蒲の花がたみ

瀧澤馬琴

蒲生修靜山陵訪求の爲に京に赴きし時、彼の地に絶えて知

（一）徳川時代後期の小説家。嘉永元年歿す。
（二）名は君平、勤王家。文化十一年歿す。

る人なし。當時小澤蘆庵は古學を好みて、萬葉風の詠歌に名高く、世をすねたる隱逸なりと、かねて傳へ聞きしかば、かれが助を借らばやとて、其の京に入りし日に、やがて蘆庵が宿所を尋ねたり。

蒲生君平

小澤が家僕出迎へて、「いづこより。」と問ふ。言寄る由もなきまゝに、修靜まづ佯りて、「某は下野なる宇都宮のほとりにて、蒲生伊三郎と呼ばるゝものなり。琴をこのみ候へども、田舍には良き師なし。主人の翁は琴の妙手にておはす

*京都の歌人。享和元年歿す。

るよし、東野のはてまでもかくれなし。これにより、御弟子にならまくほりして、はるゝ〳〵と來つるにて候。」といふ。其の僕心を得て奥に赴き、云々と告げにけん、蘆庵の聲と覺しくていと高く、あな、無益にも訪はるゝものかな。汝出でてしか答へよ。主人は久しう客を辭して交を絶ちたれば、都の中にだに親しうものせるは稀なり。琴は若かりし時かき鳴したりけれど、あちこちの人に知られて、『彼に聞かせよ、此に教へよ。』といはるゝがうるさければ、近頃打摧きて薪に代へたり。かゝれば、所望に從ふべくもあらず。他に行きて求め給へといへ。」といふ聲の、襖一重を隔てゝぞ聞えける。

修靜、僕が云々といふをも待たず、更におし返して云ふ、「翁の御答はこゝにてつばらに漏聞きたり。某なほ一言あり。願はくは、枉げて聞き給へ。吾は下野なる儒者なり。しかじかの志願あれば、しば〳〵江戸に遊學し、こたみ都に上りしかど、相識れる者絶えてなし。翁の古學を好み給ふと其の氣質の俗ならぬとは、かねて傳へ聞くものから、言寄るよしのなきまゝに、『琴を學ばんためにきたりつ。』とはいひしなり。こは長者を欺くに似たれども、其の虛言は已むことを得ざりし實情より出でたれば、許されて對面せられなば、肝膽を吐き、志願を告げて、翁の助を借らんと欲す。かくても意にかなはずば退けられんこと勿論たるべし。今一たびわどのを勞せん。この由取次ぎたまへ。」といふ。蘆庵これを漏れきゝて、「さりとは思ひがけざりき。そは奇しき客人なり。對面せずばくやしきことあらん。此方へと申せ。」とて、やがて面をあはせけり。

修靜深く歡びて、夙くより思起せる志願の由を說示し、山陵志著述のために、古き御陵を尋ねんとて、旅寢をしつる事の趣云々と語り出でつるに、蘆庵も只管感歎して、「足下は得がたき學士なり。さる志ならんには、吾が庵に杖を留めて、こゝらわたりの御陵をしづかに訪求したまへ。」とて、又他事もなくもてなしけり。

これによりて、修靜は日毎に古陵を尋ね巡るに、ともすれば

日暮れて歸るに、主人は自ら風爐を焚きて湯あみせさせければ、修靜、老人の心づかひ心苦しとて辭めども、從はず。「これらの事は只管に客を愛する故のみにあらず。吾も亦かゝる奇人に宿する事の歡ばしく、且は足下の疲勞を慰めて、國の爲に力を竭す人の助にならんとてなり。必ずいなみ給ふな。」とて、後々までもしかしてけり。

小澤蘆庵

かゝりしほどに、修靜、ある夜、更闌けて、子二つの頃、歸りしかども蘆庵はいねず待ちて居り。例の如く湯あみせさせ、飯をすゝめて、さていふやう、「吾足下に宿せし日より、蔬菜の外に物もなく、させるもてなしはせざれども、夜は老僕をやすらはせんとて、手づから風爐さへ焚くを思ひ汲み給はずや。古陵を尋ね巡ればとて、今までは要なからんに、道草くうてか。老人に物を思はせ給ふこと、心得難し。」と呟きけり。修靜聞きて、容を改め、「翁の恨、理なり。吾が非を飾るにあらねども、更闌けたるは聊か故あり。懺悔の爲に笑に供へん。けふはそれの天皇の御陵を尋ねたりしに、日の暮るゝまで尋ねもあはこ、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。こに至りて、年來の恨心頭に起りて堪へられず、墓に向ひて

*山城國葛野郡衣笠村にある。

罵るやう、『梟臣尊氏、なほ靈あらば、今いふことを慥かに聞け。汝が一旦治りたる建武中興の世を亂して、逆に取り逆に守りて毒を後世に流しゝより、五百十數年、干戈をさまらず、國の舊典もこれが爲に燒け亡び、王室もまたこれに因りて卑しく、古帝世々の山陵すら迹なくなりて、吾らにさへあくまで物を思はするは、皆悉く汝が罪なり。天罰當に知るべし。』とて杖をもて石塔を思のまゝに打ちたゝき、かくて、寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道のほとりの酒屋に立ちより、怒にまかせて飲むほどに、六七合盡したり。さて、酒屋を出でしかど、醉うて足も定まらず。此のまゝにて歸り行かば、必ず翁に叱られん。なかば醒して行かんと思うて、株に尻をかけしより、熟睡やしけん、時移りて駭き覺むれば、更闌けたり。と語る。

蘆庵ふきいだして、から〳〵とうちわらひ、さても〳〵、世の中には似たる馬鹿者もあるものかな。われら亦往ぬる年、ある日靈山(りやうぜん)の邊へ逍遙して、長嘯子(ちやうしうし)の墓をよぎりし時、流石に宿恨なきにあらねば、行きもえやらず、にらまへて、『長嘯子、不滅の罪あり。わぬしみづからこれを知るや。わぬしは豐太閤の外族とて、位高く、且、采地も廣かるに、心ざま武士に似ず、伏見の籠城に敵の旗色を見て鬼胎を抱き、鳥居元忠を捨殺にせしは不義なり。事平ぎて、罪を蒙り、わづかに命を助けられしを幸にして恥を知らず、心にもあらぬ世捨人が

(一)京都東山にある。
(二)木下勝俊。慶安三年歿す。
(三)德川家康の家臣。慶長五年伏見城で戰死した。

似非すり

ほして、えせ歌多く詠じたる、一盲衆盲を引きしより、歌の調わろくなりて、今に至るまでなほらぬは、これ不滅の罪にあらずや。冥罰かくの如くならん。』と罵りながら、杖をあげて墓を毆きたる事ありけり。こは能く似たるにあらずや。」と、語りもあへず、聞きも終らず、齊しく腹をかゝへたりとぞ。

（兎園小說）

二　天下第一の義擧

蒲生君平

前夜は參上、御意を得、殊に柿餅の御饗應、忝く存じ奉り候。其の節、折あしく他人至り候うて、用事の談話申し盡さず候。偖拙者儀かねゞ〳〵申すとほり、歷代帝王の山陵久しく荒廢して、御祀をやめ、其の所在も明かに知り得ず候間、相尋ね候へども、尙未だ遂げず候。此の度、林大學頭殿に申入れ、依つて其の使として來月五六日までに出府、それより遂に上京仕るべく候。此は忝くも一天之君世々に御祀りありて、最も尊崇すべき第一義に候へども、亂世以來、禮法壞れ、今治平二百年に及べども、上にさまで有識も無之につき、只なほざりになり來たる事に候。幸に當今御老中伊豆守殿を始め、大學頭殿、いづれも皆一代の賢才に御座なされ候。御政敎を勸め給ふ事、延喜・天曆の昔にも劣るまじく候。此の時にして、其の一二の闕を補うて忠誠を致さんこと、拙

（一）名は衡。述齋と號す。

（二）松平伊豆守信明。

者多年の願に候。不幸にして、去年父を喪ひ、此度一週忌も既に過ぎ候へば、右申上候とほりに御座候。

之に就き、江戸にも親しき二三の御旗本の合力ありて四五兩は得べく候。又、佐野・鹿沼など師友の間にて衣類・腰の物の支度を致され、數年浪々の拙者、やうやくに眞の武士に罷りなり候。さねども、關東より千里西遊、六七十日の物いりに心遣ひ申し候間、前に申す儀に免じ、金子拾兩拜借仕りたく候。此の儀、先達も申入れ候處、金の員數尚未だ定まらず、只御承知下され候間、更に如此申上候。昔、商人にも義を好み候者は、奥州の金賣吉次が九郎義經に於ける、山川屋儀兵衛が大石内藏之助に於ける、此の外にも金錢を輕んじて忠義の名を立てたる者多く御座候。此の度の儀、拙者も雪霜の寒を犯し旅行すること、貴公にも御推察候うて、金拾兩御貸し下され候はゞ、是亦天下第一の義舉に御座候。忠感定めて神明に達し候はん　且、貴公の拙者に於ける、母方の姻親、家に千金を蓄へて、固より一鄕の良と聞きたればこそ、拙者も外に求めずして貴公に直に御願ひ申す事に候。不備。

十一月二十八日　　蒲生伊三郎

岡井仁右衞門樣

（蒲生君平全集）

三　川どめ

川どめにてには直す旅日記。
筍はぬすまれてから番がつき。
寐て居ても團扇のうごく親心。
添乳してつい洗濯が夢になり。
迷子のおのが太鼓で尋ねられ。
物まうにどうれ〳〵と二目打ち。
大三十日、息災ばかり、とりえなり。
福祿壽四五にんまへの頭痛がし。
歌がるた人といふ字に手が五つ。

二三　華嚴の瀑壺

田山花袋

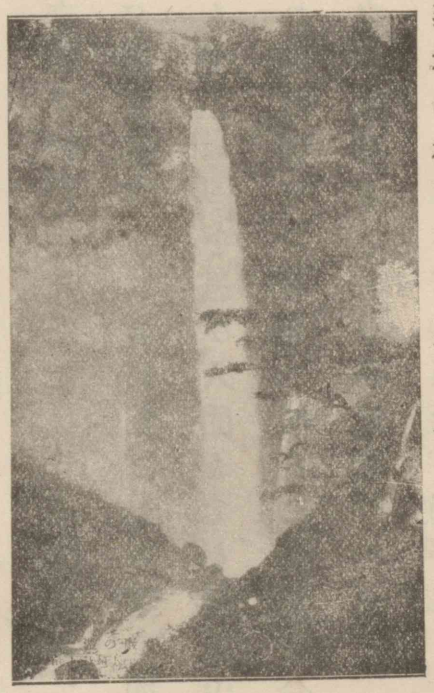
直下四十丈。聲萬嶽をうごかす。華嚴の大瀑を、下りて瀑壺より仰ぎたらんには、其の快果して如何なるべきと思へど、古來遊客の其處に到りたる者も聞かざれば、其の容易ならざるべきを思ひ、六回までも日光山に遊びながら、未だこれを敢行せざりき。然るに今夏心合へる友を得て、始めて、之を試みることを得たり。

先づ一名の年若き導者を雇ひ來りぬ。之がいふまゝに、各自十丈ばかりの細引と一箇の掛金と、行厨一箇と、草鞋四足とを時の間に準備し、午前八時一行三人、熊笹の深く生ひ茂

(一) 文學者。名は錄彌。
(二) 日光の廬の湖の落下して大谷川となる其の瀑。

れる處を、右に越え左に拔けて、只々山の奥深く奥深くと進み入りぬ。

導者は行く〳〵其の路の險なるを語り出でぬ。其の傳ひ行く處は瀑見茶屋より左の方數百步の距離なる懸崖の一端にて、數間の間を細引にて下るべき處三箇處まであり。殊に其の最後の一崖は最も危險にして、一度足を失すれば、身は千尋の谷底に陷るべしといふ。深き熊笹は絶えて、陰深極りなき大深林は、恰もアフリカ探



華嚴の瀑

檢記中の挿畫の如く、いと物凄く連りわたれり。太古以來人の足を入れたりともおぼえぬ腐木の、踏む毎にそく〳〵音を作せる間を、踏越え〳〵凡そ半里ばかりも行けば、小瀑をなして落下せる一道の溪流あり。樹の間を洩れ來る日の光微かにこれを照らせり。徒渉すれば思ひの外、流急なり。我は覺えず足をさらはれて横倒しに、平板の如き岩の上に倒れ、其のまゝ一間程押流されたり。あなやと思ひつつ、傍なる蔓を攫みて立上りしが、衣服は悉く水を被りて、其心地惡しきこと譬ふるにものなし。

腐木の限無く横たはれるを一つ〳〵越え行く辛さ。殊に、地は粘土の滑り易く、一町を行くに三十分を費す。こゝを

辿ること十町ばかり、漸くにして險しき處を過ぎて、始めて轟轟の聲を聞く。あゝ華嚴の瀑。

されど、樹影深くして未だ其の髣髴をも認むること能はず。更に行くこと一町ばかりにして、漸く新綠の間より、匹練の如き大瀑現る。

思はず手を拍ち快を叫ぶ。

「これよりは絶壁なり、益、戒心を要す。」との導者の戒に頷きつつ、木の根草の蔓をすがりて下りに下れば、やがて赤き絶壁に出でぬ。下なる一坪の平地までは凡そ十丈あらんと思はるゝを、導者は慣れたる足して、巧に掛金を岸頭の大樹に掛け、それに長き細引をつなぎて猿の如く下りぬ。

我等も亦辛うじて之に從ふ。

絶壁と絶壁との間を縫ひて、更に下り行くこと二町ばかりにして、再び危き絶壁に到りぬ。

恙なく其處をも過ぎたり。

瀑は何時しか對岸なる岸角に隱れて見えず。瀑の勢より生じたる風は凄じく、其の強さ冷たさは凡そ此の世の物とも思はれず。路は又稍下りて、岩石滑かに、足元危き絶崖へとかゝり行く。

これ最後の難處なり。

此處は四邊大樹の、掛金を掛けつべきものなく、漸くにして、葛蔓のかゝれるをたよりて、それに細引を吊し、辛うじて下

りぬ。

谷底に到れば、溪流の激奔せる、岸石の奇怪なる、今更に眼を驚かし心を奪ふ。幾千年來人跡到らざりしこととて、石は悉く滑かなる蘚苔もて蔽はれ、大樹は腐れて縱横に横たはる。

瀑壺近くに到りて見ばやと、溪流の緩やかなる處を求め、幾度か徒渉して、滑かなる岩石に滑り、絶壁の少しく曲りたる處を向ふに出でて、大岩小岩の間を右に左に辿り行けば、やがて華嚴の瀑の懸りたる谷は、窈然としてあらはれ出でぬ。仰ぎ見れば、其の奇、その快、如何なる語か之を言ひあらはさん、長瀑は岩にも樹にも遮らるゝ事なくして、九天の高きより落下せるにはあらずや。三分の一以上は水の形なれども、以下は錦となり、雪となり、烟となりて、果は霧の如く飛散したる樣の美しさ。殊に、壺より仰ぎて最も驚きしは、其の幅の廣く、其の勢の急に、其の高さのいとも高きことなり。中程なる瀑見茶屋より望みても、其の高さと廣さとを想像するを得ざるにはあらねど、斯くまで雄大莊嚴ならんとは、夢にも思ひ懸けざりき。瀑勢四面の溪山をうごかし、反響して、迅雷の如く激震の如く、砲彈の連發せらるゝが如し。此處まで來りたる身のいかで瀑壺の緣まで到らざるべきと、烈しき風と恐しき轟との間を縫ひつゝ、滑り勝なる岩石を幾箇となく越えて、飛沫の霧と迷へる間より今しも瀑壺

を窺はんとせし時、美しき日影の雲間を洩れて、四面の溪山に照りわたれば、思はず見上ぐるに、あゝ奇絶、日影を受けたる瀑は美しき七色の虹を現せるにあらずや。

あはれ、大空と大谷との間に斜に架けられたる一道の長虹顧みれば、友も驚きたるものゝ如く、只手を擧げたるまゝ凝視せるのみ。あはれ山靈、我等の志に愛でて、殊更に其の祕鑰を開きて、此の奇觀を示したるか。

されど、それも少時のみ。やがて日影は雲中に隱れ果て、長虹亦消え、凄じき風は暴風雨の如く、烈しく飛沫を吹き付けたり。

衣袂皆濕ふ。

*日光山腹にあつて、大谷川の横切るところ。

佇立沈思する事凡そ一時間。いざ歸らんとす。されど上りは、下りより更に危險なれば、他に易き路はあるまじきかと導者に問へば、「無し。」と答ふ。此の時友は、流れ行く大谷の溪流を指しつゝ、「此の流を傳ひて下りたらば、かの深澤の橋の邊に出でんも知るべからず。」といふ。導者は稍暫く考へたる後、「行きてみるべきか。已れは未だ行きたることなけれど、危き絶壁を攀ぢんよりは、或はましなるべし。」と答ふ。思へば冒險極れる企ならずや。幾多の絶壁幾多の急瀨もあるべき不知案内の谷底を、一道の溪流に就いて下らんとは。されど若き血の漲りたる我等一行は、そを事ともせずして、寧ろ新しき冒險を試むるを面白しと勇みつゝ、激流矢

の如き急流に沿ひて、徐々として下りぬ。岩石の磊々たる、腐木の蜿蜒たるは一方ならざる妨なりしかど、そを踏越えて、或は巨岩の犬牙相交りたる間を匍匐して過ぎ、或は絶壁の削れる如くなる處を下り、右に左に曲り行く大谷川を一歩一歩と辿り行きぬ。

山石

ふと前に當りて一大岩石の崛起するを認む。谷は其の鐵色の巨岩に塞がれて、全く窮り盡したるが如し。驚きて近づき見れば、溪流は其の岩の右側を洗ひて、烈しき瀨を作りつゝ、向ふの闇き潭へと通じ行けり。此處に到りて我等ははたと困じたり。水なればこそ其の狹き岩間を求めて流れ出づる事を得るなれ。我等は如何にして其の急瀨を渉り得べき。一行は其處に佇立して千々に思ひ惱みぬ。溪流は急にして渉るべからず、岩石は峻にして攀づべからず。

されど山に慣れたる導者は、やがて思ひ定めたる如く、細引を此方の岩角に結び、その一端を持して、纔かに半身を露したる小岩を足場に、ぐるりと大廻轉をなしたりと思ひしが、巧に何時か向ふの岩の一角に飛付きぬ。これより我等は其の綱をたよりに、身を激しき溪流に投じつゝ岩の間を縫ひて、辛うじて其の大岩を過ぐるを得たり。

大岩を廻りて見たる谿の面白さよ。溪山落つるが如く頭上を壓して、兩岸の絶壁迫ること漸く急に、水は皆奔走競流

の趣を呈し、逆走傍射の勢をあらはし、旋るものは輪の如く、激するものは矢の如く、千態萬狀殆ど形容すべからず。加ふるに深碧なる空は之に臨み、婆娑たる新綠はこれを蔽ひ、搖曳せる翠嵐はこれを掠めて、この一場の深谷をして無限の變化に富ましめたるをや。

一歩進みては快と叫び、一歩辿りては奇と叫びつゝ、我等は此の大谿を過ぎ盡しぬ。林立したる岩石の間を或時は靜まり或時は激しつゝ流れ行きたる大谷川の溪流は、再び懸崖のもとに迫りて、一丈ほどの小瀑布を作り、更に淀みて一町ほどの瀞をなせり。

第二の困難は、その瀞より二町ほど下りたる處にありて、こは水の五丈ばかり懸瀑を爲したるものなるが、何處に求めて傳ひ行くべき道を得ん。我等は又掛金を用ひて細引をたよりに、すると下りぬ。これより水勢いよ〳〵急に、岩石いよ〳〵多く難處は到る處にあらはれたれども、しかもさま〴〵の手段を盡して、或は涉り、或は踰え、午後三時四十分といふに、遂に大谷川のひらけたる處に達するを得たり。見渡せば其處に深澤の橋架れり。（花袋紀行集）

*英文學者。第四高等學校教授。

二四　夏

新綠　大*谷　繞　石

左に折れ又右に曲る崎嶇たる急坂を登ること十町、瀧道と

ある立札に岐路を通り谿へ下る。路とは名のみで、膝を沒する許りに繁つた熊笹が、動もすれば行く手を迷はす。仰げば日の光を遮つて、杉と檜の大木が頭上高く枝をさし交して居る。急に日暮になつたやうな氣がする。

奥へ〳〵と其の小徑を傳つて下つて行く。轟轟たる音が聞える。目ざす瀧に近附きつゝあるのだ。やがて岩に激して白沫を飛ばして居る奔流が眼下に見える。谿底へ下り着く。

向側の山は屏風を立て展げたやうな岩山だ。それでも盆栽に見るやうな枝振の好い松が、其の岩の破れ目裂け目にしがみついて生えて居る。山躑躅もある。櫨らしい若木、

楓らしい若木も見える。川に沿うて尙奥へ進む事四五十間、とある岩鼻を廻ると、幅三間はあらう白絹を垂れたやうな瀧が、對岸の絶壁を勢すさまじく轟々と音して落ちて居る。瀧壺は白波を湧きたゝせて居る

瀧の落込む岩壁の左右に、枝の茂つた若葉の楓樹が見える。瀧の風に、其の若葉の小枝が戰いて居る。こちらの山の杉や檜のどす黑い綠と對照して、其の楓の若葉の綠が殊に鮮かに觀られる。空を仰ぐと、晝の月が淡白く懸つて居る。

少雨

風に庭木の葉が戰ぐやうにも聞え、細雨が庭砂に當るやうにも聞える。自分で雨戸を繰つて見ると、矢張り細かい雨

がしめやかに降つて居るのであつた。簷から點滴を落すまでにはまだなつて居らぬ。夜は明けたばかり。

宿の番傘をさして、竹下駄くわちや〳〵浴場へ。雨に砂の匂が好い氣持だ。間近の山は木々の姿も判然して居るが、其の裏の山は霧に輪廓だけ見え、其の後の峰は頂だけそれかとばかり朧氣に浮いて居る。陳腐な言草だが全く繪のやうだ。

湯槽の中の先客が、先月八日後始めての雨だといふ。一日も二日も降續かねば畑物は息がつけまいと言ふ。浴衣の裾を褰げて宿へ。湯ほてりの脚へかゝる雨が涼しい。

風が少し出て來た。雨は歇みさうだ。山々の谿間から煙の如く雲が涌いて、頂上目がけて昇る。どの山もそれに包まれる。と見て居ると、やがて粒の太い雨が、今度は稍劇しく降り出す。谿の雲が次第に消えて、近い山は又も全身を見せる。朝の膳を持つて來るまで、飽かず雲の徂徠を眺めた。

*七月にあたる。

夕立晴

夕暮近く、南の空に雨雲が涌く。びかりと光る。程經て遠くでごうと雷が鳴る。雲は北へ〳〵と擴がる。南は墨を流したやうに黑くなる。我等が眞上の空は、雲の絶間にまだ青空が見える。「一雨來れば宜いが。」と風呂から出た父が緣で空を仰いで居る。

自分が風呂から出た時分に、果してばら〳〵と降つて來た。風の伴はぬ強からぬ雨だ。それでも軒の樋を溢れ勝だ。廊下の近くに茂る葉蘭と秋海棠とが、其の雫にひた濡れて葉を搖がせる。庭の梅の老樹、蜜柑・椿・松・木蓮など、障子を外して居る母家と裏座敷と兩方からの電燈の光を受けて葉を煌かす。涼しさうであり、又涼しくもある。

それも小半時。黑雲は通り過ぎて雨は收つた。そして上層の白雲も次第にちぎれ〳〵て、妻も湯から出て、一家が緣側へ持出した食膳に揃つた時には、空は全く澄み渡りて、恰も十五夜の月が洗はれたやうに、淸く隣家の瓦屋根から二尺も高く上つて居るのであつた。（北の國より）

二五　香港

水野廣德[一]

港門を過ぎて內港に入れば、波靜かなること池の如く、一千八百呎のヴィクトリヤピーク、海岸より突兀として直ちに中天に聳ゆ。宏壯なる石造家屋、海に沿ひ山を負ひて、層々段を爲し、朱屋白壁、翠微に連なるところ、さながら畫の如し。殊に急勾配の索道、山麓より山上まで、一直線に綠林を切割くこと一千餘呎、素練懸垂して、恰も瀑布に似たり。

香港島は支那廣東省珠江江口に在り、面積約三十平方哩の小島なり。[二]一千八百三十九年、英國に占領せられ、爾來、其の版圖に屬せり。此の地元一小漁村に過ぎざりしが、英國の

(一) 海軍中佐。

(二) 天保十年即ち淸國道光十九年鴉片戰爭の結果占領された。

占領せし以來、東洋經營の策源地として、鋭意開發に努め、今や人口四十六萬餘、貿易年額五億弗、日本よりの輸入額二千五百萬圓を超え、商業の盛なること實に東洋第一と稱せらる。帝國の總領事館こゝにあり。在留の邦人の數、一千人を超ゆといふ。市街は海岸に沿うて延長し、その中央部は純然たる西洋式市街にして、宏大なる建築物軒を並ぶれども、元來土地仄迫せるが故に道路甚だ狹く、殊に不潔なる支那人到る處に徘徊して、大に美觀を妨ぐ。前年海岸を埋立て、稍市街を擴張したれども、尙狹隘を告げ、今や對岸なる九龍租借地に向つて市街を開くに至れり。市街の兩端は純支那人町にして、臭穢甚だし。

香港の人口四十六萬人中、英人の數は僅かに四千人に過ぎずして、支那人の數は之に百十倍す。故に政治以外の實權は殆ど支那人の手に歸せるが如し。

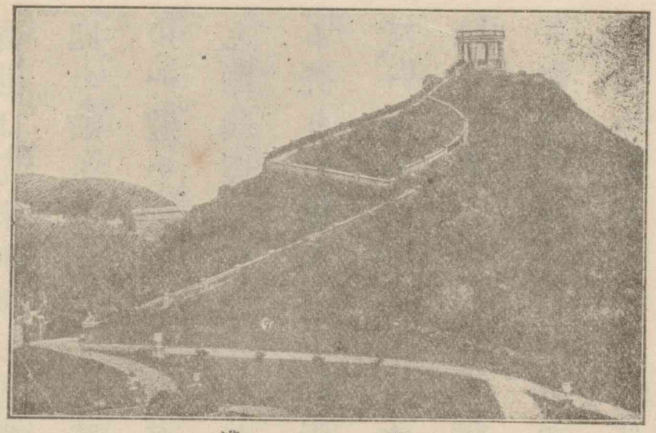
香港に於て注目すべきことは、植林事業なり。この島はも一樹をも見ざる禿山にして、到る處に山骨露出し、暑熱酷烈に、瘴癘の氣深く、人間難住の地とせられたり。然るに英人の之を占領するに及んで、熱心に植林を努め、苦心經營すること數十年、遂に其の目的を達して、今や全島翁蔚として翠綠滴るが如く、風致を美にし、氣候を和げ、病疫の發生を減ずるを得たり。吾人は今眼前にこの島を望みて、其の能く岩石を化して綠林となしたる英人の熱心と努力とに敬服

すると同時に、我が朝鮮・遼東の禿山が綠樹を以て蔽はるゝ日の一日も速かに來らんことを願ふなり。

香港は北緯二十一度十八分、我が臺灣の南端鵞鸞鼻と略、緯度を同じうす。氣候は一般に暖かにして冬季と雖も、氣溫は內地の四月頃より下ることなし。三・四・五の三箇月は雨期にして、霖雨連日、陽光を見ず。香港名物たるベスト亦此の時に發生す。ベストは香港の特有病にして官民多年の熱心なる撲滅策も未だ全く其の病源を絕つ能はず。毎年之に斃るゝもの尠き時も千を下らず、多き時は萬を超ゆと聞く。但し、罹病者は殆ど全部支那人にして、洋人、其の他の之に犯さるゝものは極めて尠し。されば、洋人は之を支那人病と稱し、毫も恐るゝ風なしといふ。

香港は元來新開の地、殊に海上の小島なれば、固より舊跡・名處の訪ふべきなく、又勝地・幽景の探るべきなし。唯外來人の一遊を試むべきは、ヴィクトリヤピークなり。壽永の昔、九郎義經が駈降りたりといふ鵯越の嶮も斯くやと思はる許りの峻坂を、海岸近き麓より海拔一千三百呎の頂上まで、一直線に通じたるケーブルカーは、三越の自働段梯子に驚く日本人の眼には、慥かに一奇蹟たるを失はず。二分の一の急勾配をば一條の鋼索によりて引上げらるゝ心持、若し此の索が切れたらばとて、初めて乘りたる田舍者の必ず一度は抱く杞憂なるべし。乘車約二十分にして、ヴィクト

リヤガップと稱ふる終點に達す。此處より山頂まで、綠松の間を縫うて、セメント固めの道路を通ず。ホテル・住宅等、或は斷崖を負ひ、或は嶮壑に臨み、層々相重なりて林間に散在す。その景致、停歩顧眄の價値なしとせず。山頂に近き處に兵營あり。戍兵今は多く本國に引揚げ、僅少の守備兵を殘せるのみ。絶頂に信號所あり。島の背面には處々に砲臺を築けり。



香港

海拔一千八百二十呎、ヴィクトリヤピークの頂上、支那海を吹渡る涼風に浴しつゝ四方を眺望せんか。香港の港は脚下に湛ひて池の如く、浮べる船舶尺に滿たず。前方には、九龍半島雙眸の裏に落ち、廣東の山峰その後に逶迤たり。汽車は黑煙を噴きて林畝の間に隱見し、汽船は銀尾を曳きて蒼波の上を滑る。眸を轉ずれば、大小幾多の島嶼は、遠近點綴、香港の港を圍み、香港の港を護る。良いかな、香　の灣、美しいかな、香港の山。地は南支の要衝に當りて、支那海の重鎭たり。港は防備宜しきを得て、難攻の軍港たり。國を東洋に建つるもの、この良港に對して垂涎禁じ難き感なくんばあらず。

（波のまに〳〵）

(一)文學士。

(二)埃及の首府。

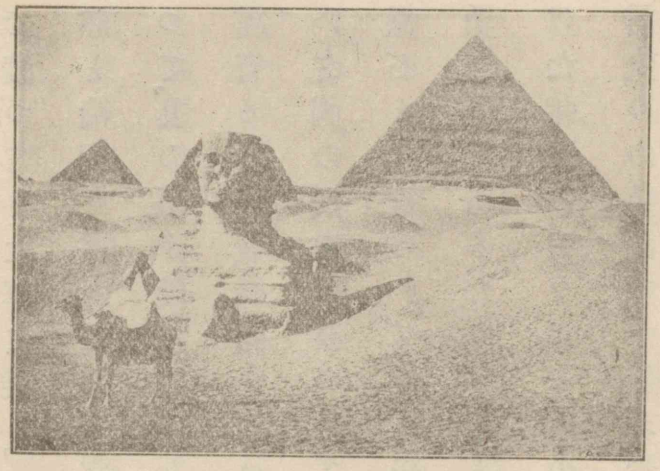
二六　金字塔

久保勘三郎(一)

「時は凡てのものを嘲る。されど、金字塔は時を嘲る。」とは、埃及の諺である。六千年の昔、さしも榮華に誇つたエチオピヤの都も、ありし昔の面影を留めず。ナイルの河の水は昔のまゝに流れてゐるが、時世の定め難きはその淵瀨にも似てゐる。沙漠の風に斷く悲しげな駱駝の聲を聞きながら、六千年を一夢と見た此の亡國の記念碑を俯仰する時、何人も無量の感慨に打たれぬものはなからう。

埃及の地を踏むもので、金字塔の頂を窮めないものは、眞に埃及を訪れたものとは言はれない。ボートサイドから汽車で行くと、四時間程でカイロ(二)府に着く。此處から、西に七哩。電車で行けば一度ナイルの大鐵橋前で降り、橋を徒歩で渡つてまた車に乘る。南方遙かに埃及の紺青の空に判然と輪廓を畫いた大金字塔がすぐ眼に入る。近づくに從つて、其の頂が段々高くなる。駱駝を勸める者、案内せんと言寄る者、運氣・緣談を占はんと附纏ふ者など、色々のうるさい亡國の民を拂ひのけて、深い砂路に靴の踵を埋めながら、臺石まで近づいて、嶮しい斜面を見上げると、之に登る力と勇氣とがあるだらうかと、一寸たじろぐ。白いガウンを附けた年輩のアラビヤ人の番人が、すぐ人の顏色を讀んで、片言交りの英語で、「もしお登りならば。」と訊く。頷いて見せると、頑丈で體の輕さうなアラビヤ人を三人あてがふ。二人は

左右の手を取り、一人は後から押上げるのである。



ピラミッド

削り立てたやうな急勾配で、下を見ると、ぞつとして目が眩く。落ちては大變と石にしがみつき、喘ぎ〳〵、休み〳〵、やつとの思で絶頂に達する。達して、目を放つと、脚下に展開する下埃及のパノラマに恍惚と醉はされて、今迄の苦痛や疲勞は何時の間にかすつかり忘れて了ふ。

脚下には大獅子面像（スフインクス）が櫛風沐雨に飽いた幾千年の首を砂上に擡げてゐる。　谿の下手にはナイルの大河が帶のやうにくねつて、銀色に光つてゐる。　岸に沿うて棗・椰子の木立が青く點々としてをり、其處彼處に黃色・黑色・鳶色がとびとびに野面を彩つてゐる。　向ふには遙かにカイロの市街の小さい縮圖が見えてゐる。　谿を越えて東には、モカタムの丘が低く横はり、西には音に聞えたサハラの沙漠が蜿蜒として波濤の如き砂丘を見せてゐる。

頂上に佇んで下界を瞰下し、遠き昔の有樣を胸に畫きつゝ時の移るのも忘れてゐると、案内人がせき立てるので、止むを得ず下へ降りる。　臺石の近くに内部へ入る入口がある。立留つて覗いて見ると、中は眞暗である。　腰を屈めて中に

這入ると、松明の光が行手を照す。此の路の長いこと〻嶮しいこと〻暗いこと〻冷たいこと〻は如何にも非常なものである。女王の室から大廻廊を攀ぢて皇帝の室へと出る。近代人といふ沒趣味な旅人の手に傷けられて今は空になつてゐる石棺の中も覗いて見る。磨をかけた石壁には、此等の人々の署名が充ちてゐる。やがて、入口に立戻ると、きら〳〵する日光に暫し眼は瞬く。

臺石の傍に立つて再び頂を見上げると、山の如く聳え立つた金字塔、是ぞ世界第一の大きい高い耐久性のある最古の墳墓であるといふことを、前より一入深く感ずるのである。

（學士會月報）

（一）國文學者。文學博士。東京帝國大學名譽教授。國學院大長

（二）閑院宮載仁親王。

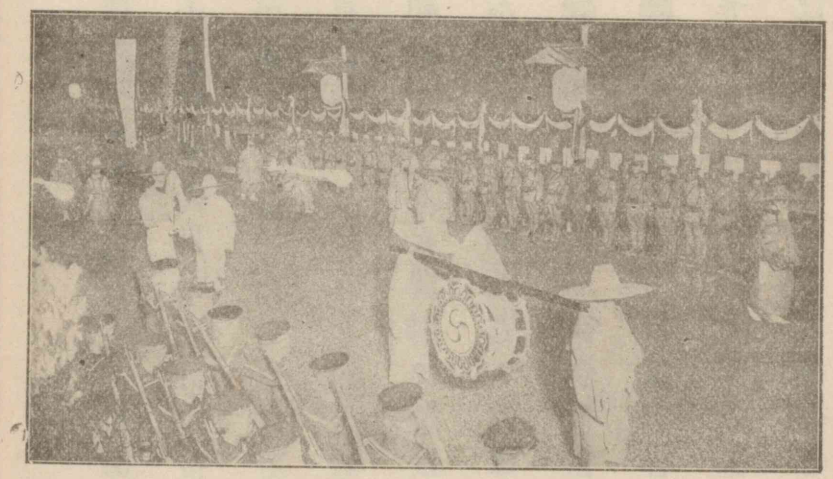
（三）伏見宮貞愛親王。

二七　九月十三日の夜

芳賀矢一

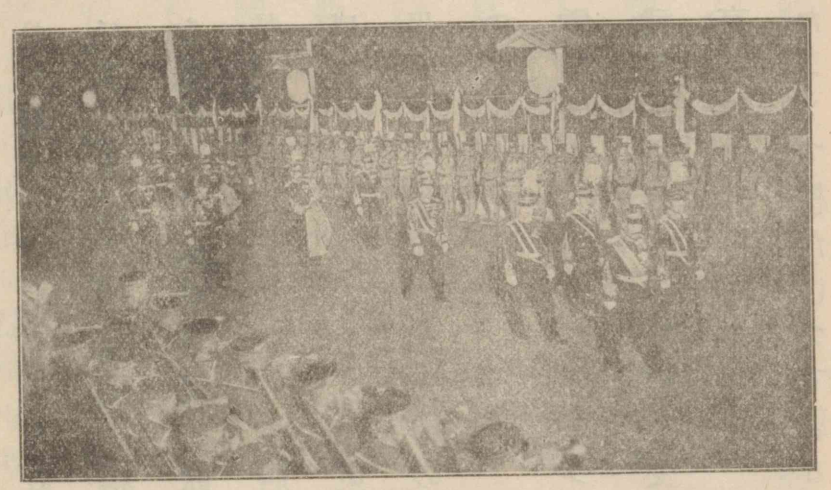
大正元年九月十三日午後七時半頃、宮城の正門外で、儀仗兵の喇叭が響いたと思ふと松明ふりかざした仕人を先頭に、長い行列が靜々と練出して來る。儀容肅々、一絲も亂れぬ觀がある。大眞榊に懸けた鏡が榊にふれて、鈴のやうな音を發し、その神々しさいはうやうも無い。正八時御靈柩を轜車に奉安して、御名代宮・大喪使總裁宮兩殿下隨ひ給ふ。轜車のきしめく音は形容は出來ないが、誠に高く哀しい音である。既に二重橋を御出ましになつたと思ふ頃、其の音はまだ門内にある我等の耳に響く　鐵橋外の御假屋には

(一)天皇陛下・皇后陛下・皇太后陛下。
(二)皇太子殿下・淳宮殿下・高松宮殿下。



明治天皇

畏くも(一)三陛下・(二)三殿下の拜送して立たせ給ふを拜し奉る。砂を敷詰めた御通路を靜かに蹈んで兩側に堵列して居る兵隊、其の後に多少の間隔を置いて奉送して居る民衆の間を過ぎて行く。兵士は捧銃して不動の位置を保ち、奉送團體も靜肅で、少しの人波も打たぬ。唯此の靜寂を破るものは、堵列兵の吹奏する哀の曲と、數分毎に打



御大葬儀

出す弔砲の響とである。沿道數箇處の寫眞場からは、時々マグネシヤを燃す白光が閃く。葬場殿の總門から第一神門を入れば、電燈の光、篝火のかゞやき、白晝のやうである。左右の幄舍の前には、菊の黑い御紋章を附けた大提燈がいくつともなく連なつて居る。やがて御儀式が始つて、誄歌の聲が悲しげに聞える。葬場殿に据ゑら

れた轜車の前に今しも陛下の御拜があると思へば、そゞろに涙ぐまれて、御誄詞を稱へ給ふ玉音は聞えないが、御心中を恐察して滿場皆聲を飲む。英・獨・西・佛・米等諸國の御名代、特派大使等の參列して居る大喪儀、我が國史あつて以來の盛儀であるのみならず、東洋で未曾有なことであることを思つて、今更ながら先帝の大御稜威をしのび、崇高の感、感謝の念が交涌く。

零時四十分御葬儀は終つて、午前二時といふに、汽笛一聲、文武百官の最後の敬禮を受けさせられて、御靈柩は長へに東京の地を御去になつた。　轜車は葬場殿の中央に榻に載つたまゝで横たはつて居る。

松明の火、鈍色の衣、千年以前の昔に返つて、古代の日本がしみじみと身に沁む。　之に對して電燈の光のかゞやき、文武官大禮服のきらびやかさ。　轜車の軋の怨むがごときに對して弔砲の轟の大空を劈くがごとき、誄歌の古樂に喇叭の哀の曲、一つとして舊日本と新日本とを對照せぬものは無い。　神代ながらの皇國を憶ふと同時に、國光の世界に輝く新興國を念はせるのである。　眞に曠古の御大葬、是は我が國より外には見られぬものである。　沿道數十萬の奉送者も、皆此の心を以て靜肅に首を垂れたのである。　諸外國の特派使節も恐らくは亦同一の感を有したであらうと思ふ。此の間に國民の感受せねばならぬ偉大な教訓は、實に明治

天皇の最後の御教訓である。（筆のまに〳〵）

二八　禁庭の野分（昭憲皇太后御作）

朝露のひるまはさしもなかりし空の、俄にかき曇り、夕づつの光も見えず。とかくする程に雨いたく降出でて、ほとり近く語りあふ人の聲だに聞きわかぬまでになりぬ。閨に入る頃は尙雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、雷さへ鳴りはたゝきて、夢現とも思ひさだむるひまなく稲妻のきらめき渡る、いとけうとし。曉がたには雨はをやみぬれど風烈しう吹き出でて、宮の内もゆるぐばかりなるに、いとゞ目もあはず。

上には民の爲とて、畏くも遠き境に出でましたるほどなれば、いかなる行宮にましゝて、この風の音に御心を惱ましゝ給ふらん。皇太后の宮にはいかにおはしますにか。幼き宮たちも驚きやし給ふらんと思ひ續くる程に、夜も明けぬれど、未だ風靜まらで、いづこもおろし籠めたる、いと物むづかし。軒近き栗の枝の結べる實ながら吹折らるゝ音いと烈しく御階の下の芭蕉も、筒井の傍なる柳も、皆折れふしぬ。今を盛りと見えし眞萩も、名殘なく散亂れたる、いとさびしく見ゆ。宮の内だにかく荒れぬるを、ましてあやしげなる賤が家居などは倒れぬるも多からんなど思ひやれば、すゞろに悲し。

*英照皇太后。

おしなべて實のりよしと聞きつる千町田の稲も吹きそこなはれつらんやなど、心にかゝりて、國のため科戸の神も心して、稲葉の上はよきて吹かなん。

なほとやかくとむねをいたむるほどに、いつとなく靜まりて、日影まばゆく雲間にさし出でぬるに、おのづから人の心もおちゐにけり。（昭憲皇太后御集）

二九　空行く雁　曾我物語

頃は人皇八十一代安德天皇の養和元年辛丑、新玉の年立返りて、[一]萬は九つ、[二]箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、「いかに、母御前。父はいづくにおはしますぞや。其の佛は何處にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせ給へ。」といひければ、はるかに忘れたるこし方も今更思ひ出されて、消えいるばかりなり。母泣く〳〵のたまひけるは、「あの[三]曾我殿こそ己らが父にてあれ。」と心強く語られけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは、「父御前は、まことやらん、狩場より歸り給ふ道にて、[四]工藤一藹とやらんに射られ、死に給ひぬと兄御前は語らせ給ふぞや。當時[五]鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありと

(一) 曾我祐成。
(二) 曾我時致。

(三) 曾我祐信。
(四) 工藤祐經。
(五) 源頼朝。

や。我らをも殺さんとや思ふらん。我らが此の里にありと知らでや過ぐらん。」などおとなしく語りければ、母より始めて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

かくて、夏も過ぎ、秋もたけ、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛行くを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼ぞ交へざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物言はぬ鳥類すらかくの如し。我らは人倫に生れながら、わごのは弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我らが父をば河津殿と

*河津祐泰。

申してありきとかや。父だに世におはしまさば馬・鞍をも賜はり、弓・矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありく者の我々より幼き者にも、馬・鞍・弓・矢を持ちて物を射ありく者のあるが羨ましさよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前のこひしく思ひ參らせらるゝぞや。」とて、袖に顔をさし入れてさめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顔をあはせて泣き居たり。一萬の乳母の女房これを聞きつけ、「あな、あさまし。人もこそ聞け。いかに、和上藹たち、夜も更けぬるに、さやうにてはおはするぞ。とく〳〵入らせ給へ。」とおそろしげにいひければ、二人の者は門外へ逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて、後に内へは入りにけり。

(二)獨逸ライン河の左岸にある都會

(三)獨逸の作曲家。

三〇　月光の曲

(一)ボンにありし日の事なり。われは暫しそゞろ歩きして、後、晩餐を共にせばやと思ひて、(二)ベートーフェンを訪ひぬ。さて、連れだちてとある薄暗き小路を過ぎけるに、友はつと立止りて、いふやう。

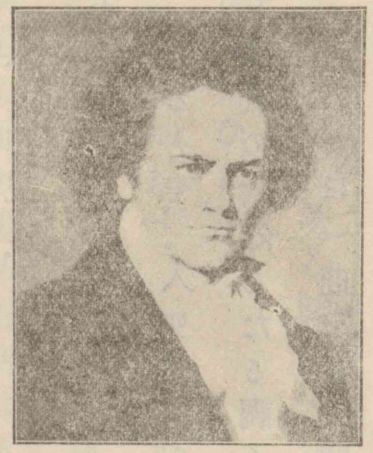
「何者の音ぞ。あれはわがものせしへ調のソナタなり。聞きたまへ。見事にも奏づるものかな。」

そこはいぶせき伏屋なり。われは軒の下に佇みて聞きとれつ。樂の音はやゝ永くうちつゞきたりしが、末節のなかばにてはたと止みて、深き惆悵の聲漏れきぬ。

*獨逸ライン河の左岸にある都會。ボンより約二十哩。

「妾はこの曲を續くる能はず。こはいみじく妙なる曲なれば、拙きわが手には合ふべくもあらず。いかなれば、妾はコローンの演奏會にも行く事の叶はぬ身の上ぞ。」

伴侶の聲として、



ベートーフェン

「わがはらからよ。よしなき事。悲しみ歎けばとて、せんかたなきにあらずや。われらはこの家の家賃すら拂ひかぬる身なるものを。」

「ことわりなり。されど、わらはゝ生涯のうちにたゞ一度、たゞ一度なりとも、いみじき樂の音をきかまほしうこそ。

されど、かく言ひたればとて、せん方もなし。」

友はわれを顧みて、いひぬ。

「入りて見ん。」

われは叫びぬ。

「入るとや。入りて、何をかなすべき。」

友は氣のりのしたる調子もて答へぬ。

「かの女に一曲を奏で聞かせん。如何にもこの道にふさはしき感情あり、天才あり、理會力あるやうなれば、かの女は必ずわが奏づる所を解し得ん。」

わが制しも敢へぬうちに、友の手ははや戸にあり。戸は開きぬ。われらは内に入りぬ。

蒼白き顔したる若者、机に凭りて靴を造れり。傍に古風なるビヤノありて、うら若き一人の少女、悲しげにその上にもたれかゝり、髪の毛は顔の上に垂れたり。二人ながら裝は瀟洒なれど、その衣はいたくあはれなるものなりき。われらのつと入りし時、二人は立ちあがりて、こなたを眺めつ。友はいひぬ。

「免したまへ。いみじき樂の音に誘はれて、かくは打驚かしまゐらせたり。わが身は音樂者にて侍り。」

少女は面を赧め、若者はうち沈みて、迷惑なるけしきなり。友は言葉をつぎぬ。

「われは御身等のうち語らふを漏れ聞きたり。所用とい

ふはこの事なり。われ御身等のために一曲を奏でんと思ふが、如何に。」

事の餘りに唐突なりし上に、友の身振の何となく滑稽なりしかば、この家の沈鬱は頓に破れて、皆思はずもほゝゑみたりやゝありて、若者、

「忝し。されど、われらがビヤノはいと粗末なるが上に、樂譜も無ければ、」

友はいはせも果てず、

「樂譜無しとや。さらば、かの年若き人はいかにしてか。」

言ひも終へずして、友は面を赧めぬ。この時、友はふと少女の面を見しに、あはれや、かの女は盲にてありけるなり。友はあわてゝ語をつぎぬ。

「あな、免したまへ。われはつゆ知らざりしなり。さらば、かの人は樂をば耳もて覺えたまひしか。さはれ、演奏會にも行きたまはずときくいづくにてかその譜をば聞覺えたまひし。」

「われら、二年あまりブ*ルールに住み侍りしが、その頃、程近きわたりにある姫君の住みたまへるが、樂をば奏でたまふ、夏の夕べなどには窓をうち開きてものしたまふが例なりければ、われらはその窓の下をさまよひありきつゝ、只管にその音に耳傾くるを常とし侍りき。」

少女は深く恥ぢらひたる樣子なりければ、友はこの上には

*獨逸ライン河の左岸、ボンとコローンとの中間にある小都會。

何事をも語らで、やがて、靜かにピヤノの前に座を占めて、奏で始めたり。友はいと興に入れるものゝ如く、その指は鍵板の上を左に右に走り歩きて、妙なる調はいよ〳〵美はしく、また、いよ〳〵諧和せり。げに、われは、わがベートーフェンを知りしよりこのかた、彼の今宵の如く妙なる樂を奏づるをば聽かざりき。二人は驚愕と歡喜とに一言もえ言はず。若者は靴を下におき、少女は頭を少しく前方に垂れ、手もて胸を堅く抱きつゝ、ピヤノに近く腰を下せり。われらは齊しく靈妙不可思議なる夢路をたどりつゝ、只、管にその夢の覺めんことを氣づかひたり。

寂しき蠟燭の焔は俄かにゆらめき、またゝきて、遂に消失せぬ。友はこゝに暫し中止せしかば、われは起ちて窓をおし開きて、輝ける月光をば室内に導き入れつ、室はまた元の如く明るくなりて、月の光はピヤノと友とをいと強う照したり。されど、友の感興はこの事の爲に絶たれたりと覺しく、友は頭を胸の上に垂れ、手を鍵板の上に置きたるまゝ、深き冥想にうち沈みぬ。若者はつと立上りて、友の側に寄りて、つゝましげに問ひぬ。

「いみじき人よ。御身は何人にてましますか。」

「まづ、わが奏で出づるを聞きたまへ。」

友はやがてソナタの初なる小節をへ調にて奏でぬ。

「さては、御身はベートーフェンにておはせしか。」

呼ばはりざま、二人はかれの手に熱き感謝の涙を注ぎぬ。

友はやをら起ちあがりて去らんとしければ、かれらは言葉を盡して引きとめつ。

「願はくは、われらがために今一度、たゞ一度、奏で給へや」

友は再び樂器の前に復しぬ。月光は窓より入りてかれのおどろなせる亂髪とその偉大なる軀幹とを輝くばかりに照しぬ。

「われは月に寄せたる卽興の一曲を奏でん。」

友はかく言ひつゝ、空と星とをうちながめて何事をか沈思するごとくなりしが、やがて、その手は鍵板の上に落ちぬ。かくて、悲しくも又かぎりなく愛でたき妙音をぞ彈じ出したる。そはものしづかに樂器の上に漂ひて、さながら平和なる月光の物暗き地上に落ちたるにも似たりけり。これについて、妖魔が芝生の上に躍り狂ふが如き奇怪なる短曲あり。更に翺翔不安、さては、恐怖などに魘はれたる如きものゝ一節にて終りぬ。われらは皆瑲々たる清き樂音の翼に載せられて、感歎と驚愕との境に運び去られたるが如き心地したりき。

友は起ちて椅子を押しやり、戸口の方にうち向ひつゝ、

「さらば、御身等。」

二人は一齊に言へり、

「またも訪はせたまはんや。」

友は佇みて同情に堪へざるものゝ如く、目しひたる少女の顏をばしげ〳〵とうち眺めて、

「然り、また來るべし。その時は貴女に何を敎ふべき。」

かくいひつゝ、われを顧みて、

「いざ、急ぎ歸らん。忘れざるうちに今の曲を寫し置かん。」

二人は見えずなるまでわれらが後影を見おくりぬ。われらは足を早めぬ。かくて、彼は東の空の白みわたるまで孜孜としてその曲を寫しぬ。これぞ我人のさばかり親しめる「月光の曲」の由來なりける。

六訂女子國語讀本卷五 終

大正十四年二月十八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科書

六訂女子國語讀本 全十冊

明治三十五年一月三日 初版發行
明治三十五年三月二十六日 訂正再版發行
明治三十六年十月二十日 訂正三版發行
明治三十七年一月十七日 訂正四版發行
明治三十九年十二月二十九日 訂正五版發行
明治四十年四月八日 訂正六版發行
明治四十年八月二十七日 訂正七版發行
明治四十年十一月三十日 訂正八版發行
大正元年十月三十一日 訂正九版發行
大正二年一月二十日 訂正十版發行
大正三年十月三十日 訂正十一版發行
大正四年一月二十二日 訂正十二版發行
大正七年七月三十日 訂正十三版發行
大正八年一月十五日 訂正十四版發行
大正十年十月二十九日 訂正十五版發行
大正十一年一月十七日 訂正十六版發行
大正十二年十二月卅一日 訂正十七版發行
大正十三年十月卅一日 訂正十八版發行
大正十四年二月九日 訂正十九版印刷
大正十四年二月十二日 訂正十九版發行

定價
卷一、二、五、六、七、八、九、十 各金參拾七錢
卷三、四 各金參拾九錢

昭和二年度臨時定價
卷一、二、五、六、七、八、九、十 各金六十三錢
卷三、四 各金六十六錢

不許複製

著作者 吉田彌平
同 小島政吉
同 篠田利英
同 岡田正美

東京市神田區美土代町三丁目一番地
印刷兼發行者 金港堂書籍株式會社
代表者 原安三郎

東京市麴町區飯田町三丁目十番地
印刷所 獅子吼堂印刷所

東京市神田區美土代町三ノ一
發賣所 金港堂書籍株式會社

賣捌所 各府縣特約販賣所